比恵62

—比恵遺跡群第120次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1132集

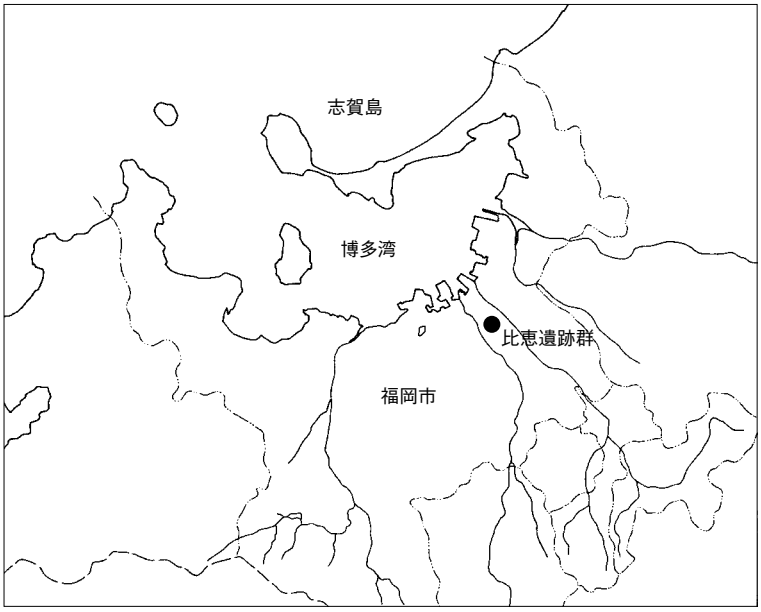
2011

福岡市教育委員会

比恵62

—比恵遺跡群第120次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1132集



調査番号　１００４
遺跡略号　HIE-120

2011

福岡市教育委員会

序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十一世紀のアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指してさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、集合共同住宅の建設に先立って実施した比恵遺跡群第１２０次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、弥生時代前期の貯蔵穴群や古墳時代初頭の溝状遺構などが発見されました。殊に古墳時代初頭の溝状遺構には、壷や甕、高坏が多量に一括投棄されていました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、地権者をはじめ多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成 23 年 3 月 18 日

福 岡 市 教 育 委 員 会
教育長　山 田 裕 嗣

れ　い　げ　ん

１．本書は、福岡市教育委員会が福岡市博多区博多駅南６丁目３１－５で計画された共同住宅の建設に先立って、平成 22（2010）年４月 13 日～５月 20 日までに発掘調査した比恵遺跡群第１２０次調査の発掘調査報告書である。
２．本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
３．遺構は、貯蔵穴をＳＵ、甕棺墓をＳＴ、土壙墓をＳＲ、土壙をＳＫ、溝遺構をＳＤ、ピットを SP と記号化して呼称し、その後にすべての遺構を通番して０１からナンバーを付した。
４．本書に掲載した遺構と遺物の実測には小林義彦があたったが、遺物の実測には大塚紀宜（埋蔵文化財第２課）の協力を得た。
５．本書に掲載した遺構と遺物の製図は、小林と大塚のほか今村ひろ子が作成した。
６．本書に掲載した遺構と遺物の写真は小林が撮影した、全景写真は、デジタルモザイク写真で合成した。
７．本書の執筆・編集は小林が行った。
８．本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序
Ⅰ．はじめに …… 1
　１．発掘調査にいたるまで …… 1
　２．発掘調査の組織 …… 1
　３．立地と歴史的環境 …… 4
Ⅱ．調査の記録 …… 7
　１．調査の概要 …… 7
　２．これまでの調査 …… 8
　３．弥生時代の調査 …… 11
　　１）．貯　蔵　穴 …… 11
　　２）．土　　壙 …… 15
　　３）．甕　棺　墓 …… 16
　　４）．箱式石棺墓 …… 17
　　５）．溝　遺　構 …… 17
　４．古墳時代の調査 …… 24
　　１）．土　　壙 …… 24
　　２）．土　壙　墓 …… 24
　　３）．溝　遺　構 …… 24
Ⅲ．おわりに …… 26

挿図目次

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1／25,000） …… 2
Fig. 2　比恵遺跡群周辺旧地形図（1／20,000） …… 3
Fig. 3　比恵遺跡群位置図（1／10,000） …… 5
Fig. 4　第 120 次調査区周辺現況図（1／500） …… 6
Fig. 5　遺構配置図（1／100） …… 7
Fig. 6　弥生時代の遺構配置図（1／200） …… 11
Fig. 7　33・47・50・52 号貯蔵穴実測図（1／40） …… 12
Fig. 8　47 号貯蔵穴出土遺物実測図（1／4） …… 13
Fig. 9　53・54 号貯蔵穴実測図（1／40） …… 13
Fig.10　48 号土壙実測図（1／20） …… 14
Fig.11　48 号土壙出土遺物実測図（1／4・1／1） …… 14
Fig.12　1・3 号甕棺墓実測図（1／20） …… 15
Fig.13　1・3 号甕棺実測図（1／12） …… 16
Fig.14　49 号石棺墓実測図（1／20） …… 17
Fig.15　34 号溝実測図（1／70） …… 18
Fig.16　34 号溝出土遺物実測図 1（1／4） …… 19

Fig.17　34 号溝出土遺物実測図２（1 ／ 4）…… 20
Fig.18　34 号溝出土遺物実測図３（1 ／ 4）…… 21
Fig.19　古墳時代の遺構配置図（1 ／ 200）…… 22
Fig.20　２号土壙実測図（1 ／ 30）…… 23
Fig.21　２号土壙出土遺物実測図（1 ／ 4）…… 24
Fig.22　51 号土壙墓実測図（1 ／ 20）…… 25
Fig.23　19・31・44・60 号溝断面図（1 ／ 30）…… 25
Fig.24　19 号溝出土遺物実測図（1 ／ 4）…… 26
Fig.25　貯蔵穴断面模式図（1 ／ 100）…… 26

表　目　次

Tab．1　比恵遺跡群発掘調査一覧表１…… 9
Tab．2　比恵遺跡群発掘調査一覧表２…… 10

図　版　目　次

ＰＬ．1　1）調査区全景（南から）　2）調査区東側貯蔵穴群（南から）
ＰＬ．2　1）33 号貯蔵穴（南から）　2）33 号貯蔵穴（東から）
3）33 号貯蔵穴断面（東から）　4）47 号貯蔵穴（北から）
5）47 号貯蔵穴（東から）　6）47 号貯蔵穴断面（北から）
7）47 号貯蔵穴（北から）　8）47 号貯蔵穴遺物出土状況（西から）
ＰＬ．3　1）50 号貯蔵穴（西から）　2）50 号貯蔵穴断面（南から）
3）52 号貯蔵穴（東から）　4）52 号貯蔵穴断面（東から）
5）53 号貯蔵穴（東から）　6）53 号貯蔵穴断面（東から）
7）54 号貯蔵穴（北から）　8）54 号貯蔵穴断面（北東から）
ＰＬ．4　1）１号甕棺墓（西から）　2）１号甕棺墓断面（東から）
3）３号甕棺墓・２号土壙（南から）　4）３号甕棺墓（南から）
5）３号甕棺墓（西から）　6）49 号石棺墓・53 号貯蔵穴（東から）
7）49 号石棺墓（東から）　8）49 号石棺墓（南から）
ＰＬ．5　1）51 号土壙墓（東から）　2）51 号土壙墓（南から）
3）48 号土壙（東から）　4）48 号土壙（南から）
5）48 号土壙遺物出土状況（東から）　6）34 号溝（東から）
7）34 号溝西端部（西から）　8）34 号溝西端部（南から）
ＰＬ．6　1）34 号溝西端部遺物出土状況（南から）　2）34 号溝東端部遺物出土状況（南から）
3）19・60 号溝（北から）　4）19・60 号溝遺物出土状況（東から）
5）出土遺物１（縮尺不同）
ＰＬ．7　出土遺物２（縮尺不同）
ＰＬ．8　出土遺物３（縮尺不同）

Ⅰ．はじめに

１．発掘調査にいたるまで

比恵遺跡群は、福岡平野を北流する那珂川の右岸に沿って長くのびる春日丘陵の最北部に位置し、近年まで都市近郊ののどかな田園風景が拡がっていた。しかし、急速な郊外の市街化で丘陵上には一面に住宅が建ち並び、旧地形の面影はない。更に、２１世紀を迎えた今日、経済成長に伴う再開発に押されて木造住宅の中高層化が進み、昔日の田園風景は全く失われつつある。

博多駅南６丁目周辺もその例に漏れず、JR 九州の竹下駅に近い利便性もあって幹線道路沿いには中高層の共同住宅や商業施設を中心とする町に変容しつつある。このような中で、博多駅南６丁目３１－５地内で専用住宅から共同住宅への立て替えが計画され、その旨の申請が埋蔵文化財第１課に提出された。この地は、比恵遺跡群として周知化された埋蔵文化財包蔵地内にあり、４丁目と６丁目の境をなす幹線道路周辺には弥生時代から古墳時代に亘る遺構が濃密に拡がっており、申請地周辺でも弥生時代の遺構が数多く報告されている。また、北西方向にある春住小学校の西隣には「那津官家」跡と推定される３本柱の柵列で区画された倉庫群が拡がっている。このような環境の中で申請地にも弥生時代から古墳時代の遺構が拡がっていることが予想され、平成 22（2010）年３月 25 日に実施した試掘調査の結果もこのことを裏付けるものであった。そこで、建築物によって破壊される範囲を発掘調査して記録保存し、駐車場は現状保存を図ることとなった。

発掘調査は、平成 22（2010）年４月 13 日よりはじめ、密集する貯蔵穴群や弥生時代終り～古墳時代初めの壷や甕、高坏などがまとまって投棄された溝遺構などを検出して５月 20 日に無事終了した。この貴重な成果は、地権者のご理解、ご協力と指導、助言を頂いた先輩諸氏および発掘調査に従事した方々の労苦に負うところが大きい。ここに記して改めて感謝の意を表します。なお、発掘調査は事業の性格上、民間受託事業と国庫補助事業とで実施した。

２．発掘調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　文化財部埋蔵文化財第２課
　埋蔵文化財第２課長　田中寿夫
　埋蔵文化財第２課調査１係長　米倉秀紀
調査庶務　埋蔵文化財第１課管理係　井上幸江
調査担当　埋蔵文化財第２課　小林義彦
調査・整理作業　石橋陽子　伊藤美伸　今村ひろ子　浦崎てい子　大瀬良清子　坂梨美紀　知花繁代　塚本よし子　土斐崎孝子　西田文子　馬場イツ子　濱フミコ　日高芳子　増田ヒロ子　松下さゆり　森田祐子　諸泉良子　渡部律子

発掘調査や資料整理にあたっては、蔵冨士寛氏、大塚紀宜、田尻直子氏の協力を得た。その協力に謝意を表するとともに本報告に十分に生かせなかったことを深くお詫びする次第である

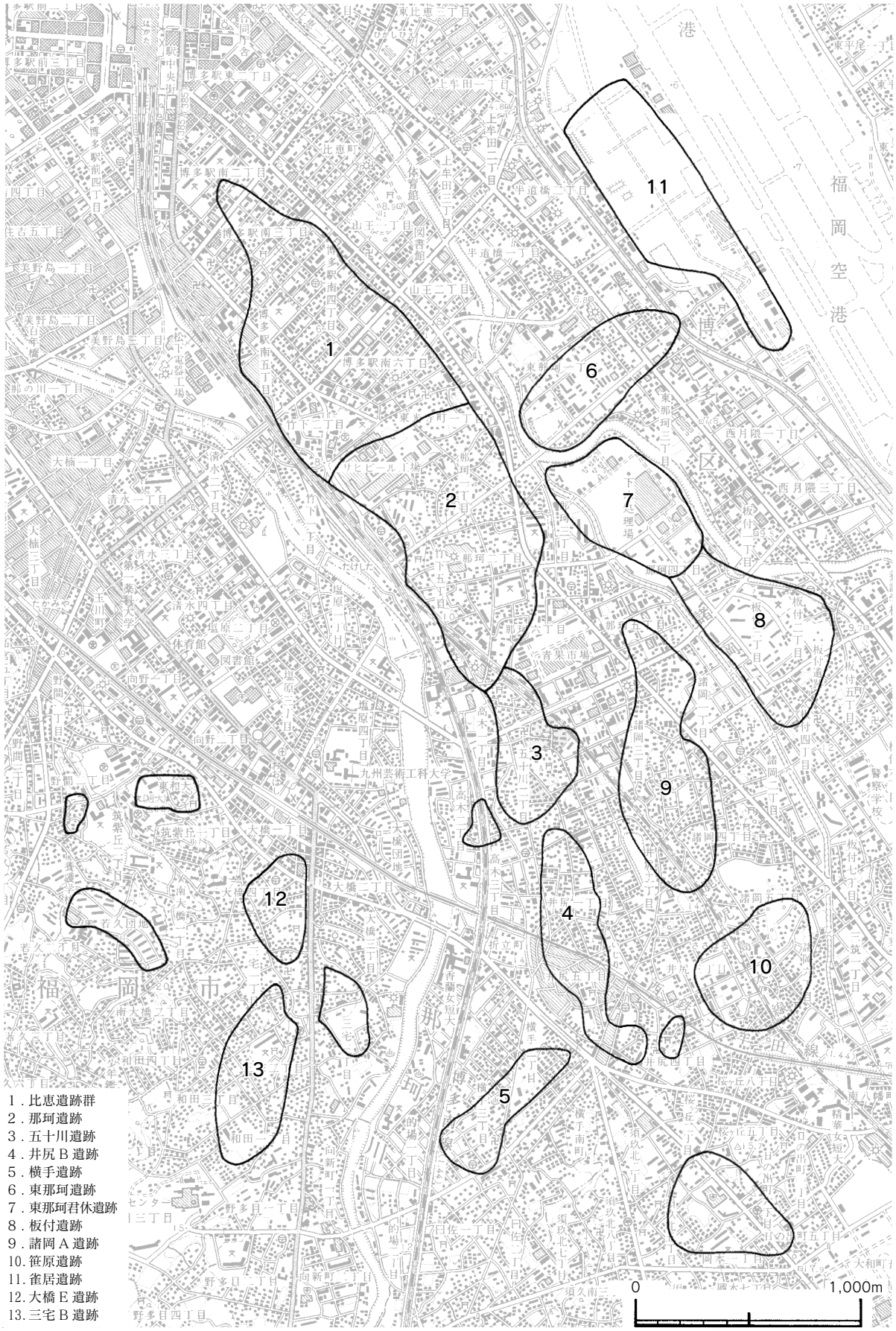


Fig. 1　周辺遺跡分布図（1 ／ 25,000）

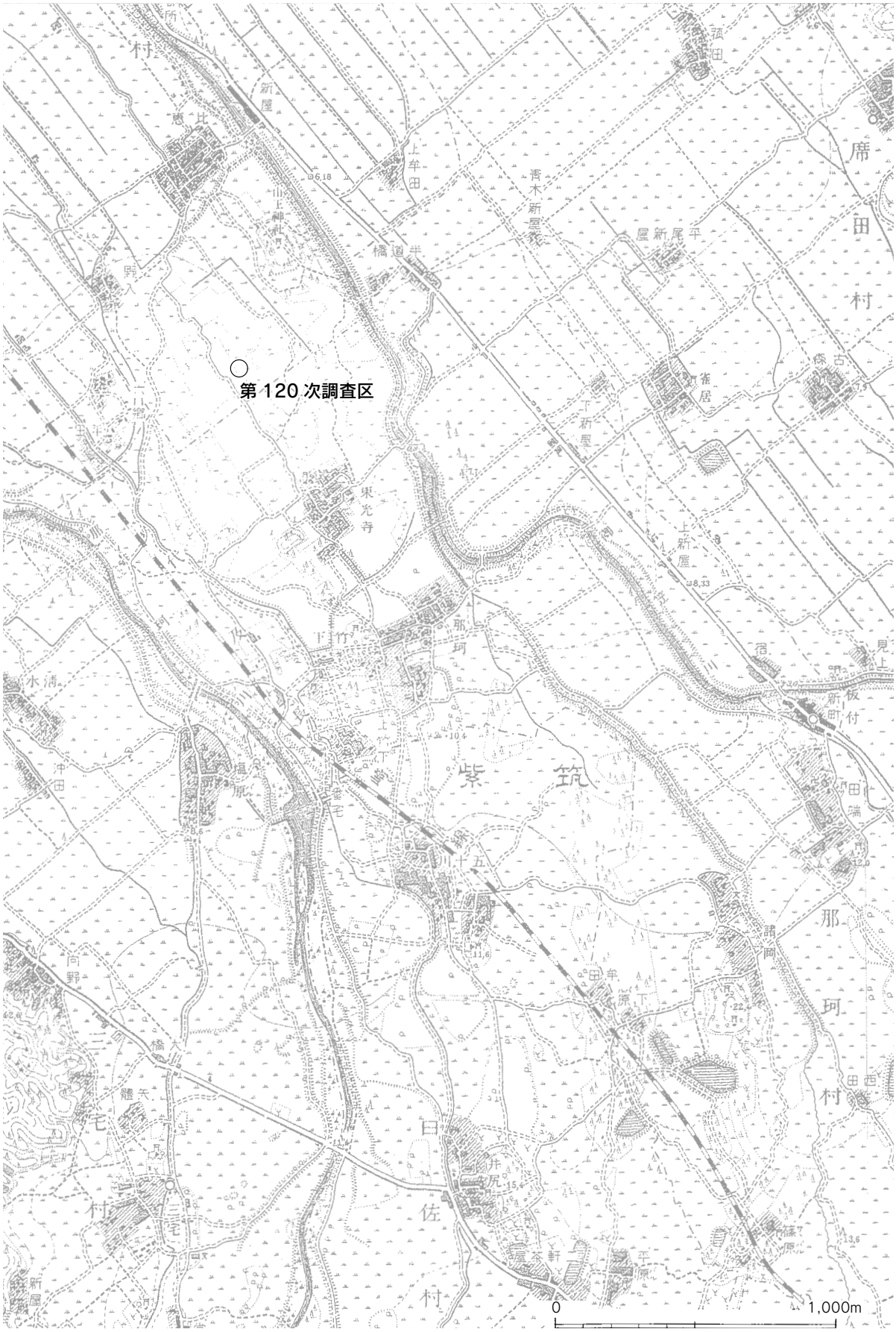


Fig. 2　比恵遺跡群周辺旧地形図（1 ／ 20,000）

３． 立地と歴史的環境

比恵遺跡群のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘に臨む博多湾に面した沖積平野である。この福岡平野の中央部を北流して博多湾に注ぐ那珂川と御笠川の間には、春日丘陵から断続的に長くのびる洪積台地が形成されている。春日丘陵と総称されるこの洪積台地は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層部には阿蘇山の火砕流による八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積している。この春日丘陵は、奴国王の王墓地とされる須玖岡本から井尻、五十川を経て那珂、比恵へと続いて博多湾の海岸砂丘に北面しており、それらの丘陵上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連綿と複合的に展開している。殊に、弥生時代から古代にかけては濃密な分布状況を示している。

比恵遺跡群は、この春日丘陵最北端の標高５～10 mの洪積台地上に立地し、南の那珂遺跡群とは丘陵鞍部を挟んで同じ丘陵上に連なり、便宜的に北半部を比恵遺跡群、南半部を那珂遺跡群と呼称している。元来この比恵丘陵は、那珂・御笠両川の開析による樹枝状の複雑な湾入や起伏があり、丘陵の西縁や北部は丘陵本体から切り離された島状をなしていたと推測されている。第 120 次調査地は、この比恵遺跡群の南西縁部に位置し、北東側に拡がる丘陵上には弥生時代から古墳時代の集落域が濃密に拡がっている。

比恵・那珂遺跡群では、1938(昭和 13) 年の区画整理時に発見された環濠集落の調査以来、これまでに 240 地点を超す発掘調査が実施され、台地上において連綿と営まれた各時代の集落や墳墓地の様相が次第に明らかになりつつある。比恵遺跡群を概観すると、人跡の初現は後期旧石器時代に始まり、第 18 次調査区で同期の遺物が検出されている。那珂遺跡群でも、丘陵南東縁の第 38・41 次調査区などでナイフ形石器や彫器、剥片などの遺物が出土しているが、いずれも散逸的な分布にすぎない。縄文時代も晩期前半までは、石鏃や石匙、土器片などが断片的に出土しているのみで遺構に伴った明確なものはない。突帯文期に至ってはじめて遺構が出現し、弥生時代前期にかけて丘陵縁辺の低位な段丘を中心に集落域が形成され、高所には竪穴住居や貯蔵穴群が確認されており、幾つかの集団によって群構成されている。この傾向は､那珂遺跡群でも同様で北端部（第 37 次調査）や中央部（第 67 次調査）の高所では二重環壕集落などが検出されている。この前期後半～中期には周辺沖積地の開削によって集落域は丘陵の縁辺部から尾根状へと次第に拡大していく。中期後半から後期には、比恵・那珂遺跡群とも集落域は爆発的に増加し、丘陵上の全域が集落域と化す感がある。銅剣や銅弋・銅矛などの鋳型や中子なども出土し、青銅器を生産する工人集団の工房群が台地の尾根上に現れる。また、集落域の周辺には墳丘墓をはじめとする甕棺墓群も造営され、丘陵の北側では細型銅剣を副葬した甕棺墓を内包する中期初頭～前半の墳丘墓（第６次調査）が形成される。那珂遺跡群の北側でも中期中葉～後期の墳丘墓が形成されている。一方、丘陵の東側に拡がる沖積地（第１次調査）では、中期中葉～後期前半の大規模な水田が確認されている。

古墳時代になると、台地の中央部に福岡平野で最古期の前方後円墳である全長 85 mの那珂八幡古墳が造営され、その木棺内には三角縁神獣鏡が副葬されていた。これに続いて６世紀後半には、那珂八幡古墳の北 500 mの台地上に東光寺剣塚古墳と剣塚北古墳の２基の前方後円墳が造営される。このうち、東光寺剣塚古墳は、三重の周溝をもつ全長 140 mの筑前地域で最大級の前方後円墳である。また、近年丘陵上の各所で円墳等の周溝が発見されており、丘陵上には開発で失われた古墳群が存在していた。一方、この時期の集落域は、５世紀後半代まで一時的な衰退傾向が窺われるが、これを境に再び大規模な集落形成が展開をはじめる。

６世紀代には、竪穴住居と掘建柱建物からなる集落域が丘陵の低位を避けた高所に幾つかにまと

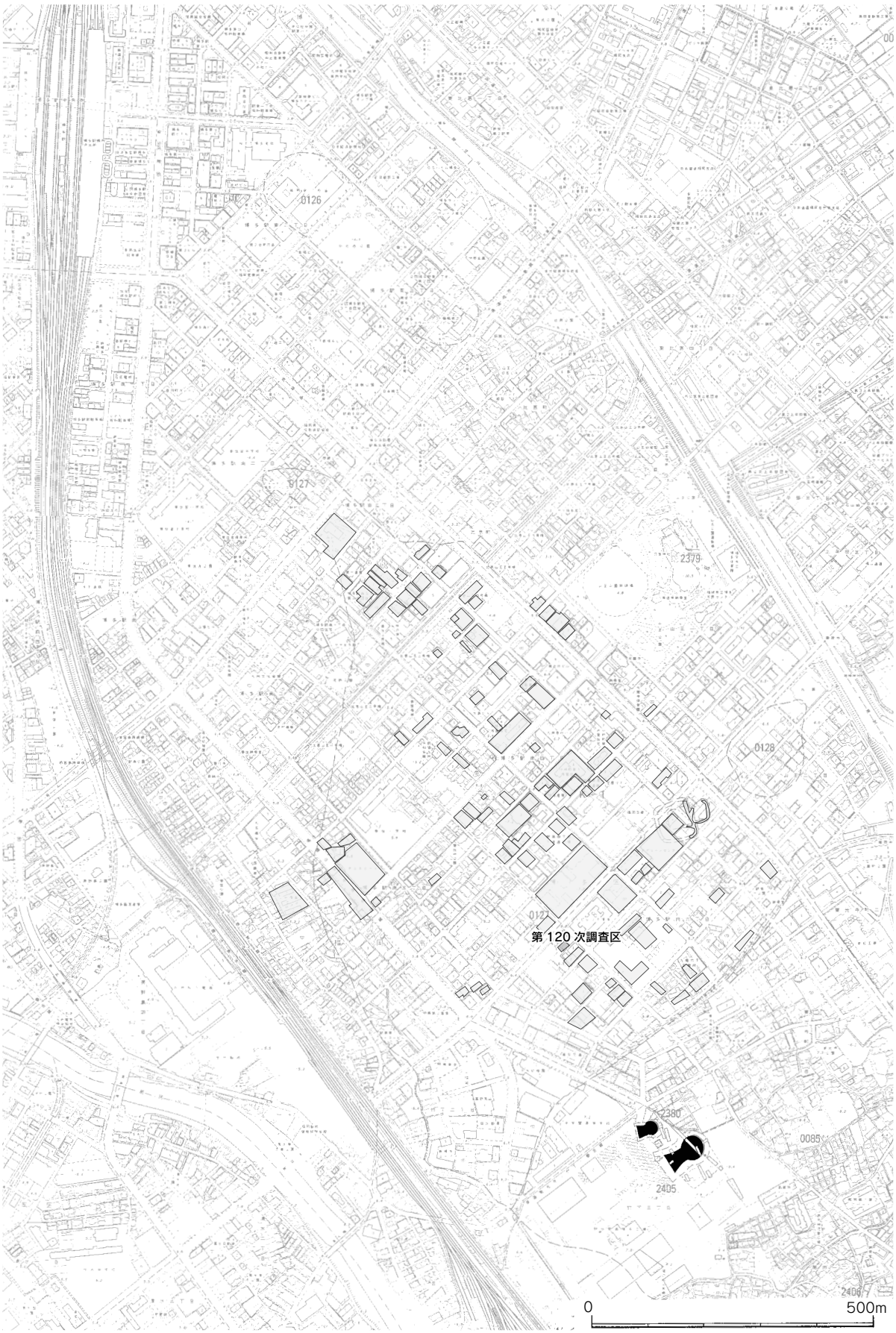


Fig. 3　比恵遺跡群位置図（1 ／ 10,000）

まって拡がっている。比恵遺跡群では丘陵の北半部、那珂遺跡群では中央部の西側域に集落が展開しない空間域がある。また、集落の展開するエリアでは、遺構間の重複が著しく比較的長い期間に亘って同一のエリアで集落域を構成したものと考えられる。6 世紀後半～7 世紀前半には、企画性の高い柵列に囲まれた大規模な掘建柱建物の造営が丘陵の各所ではじまる。これらの建物群は、既存の集落域から離れた丘陵の高所に造営される。第 8 ・72・109 次調査区では集落域と重複しているが、これは集落域とは共存せず、集落の廃棄後に造営を始めている。これは企画性の高い建物群が既存の集落域から隔絶したものである証左であり、官衙的な機能を有する建物群であることを示しているとも云える。那珂遺跡群でも同様の建物群が検出されており、何らかの有機的な関連性も想起される。これら官衙的な様相を帯びた企画性の高い建物群は、記紀に記された「那津官家」との関わりが強く指摘されている。

奈良時代以降になると、集落域は急速に縮小し、遺構の中心域は那珂遺跡群に移る。この時期、那珂遺跡群内では真北にのびる直線的な溝が開削され、その溝内からは瓦や硯などがまとまって出土していることから郡衙や寺院などの存在が想起され、中心的な拠点的集落として捉えることができよう。また、比恵遺跡群の東側をいわゆる水城東門ルートと呼称される官道が N － 43°－ W の方位でほぼ直線的にのびて博多遺跡群に到達すると考えられている。これに従うと官道は、比恵遺跡群の丘陵の東側を貫くことになるが、明らかな道路遺構は、調査例がなく、今後の報告が期待される。

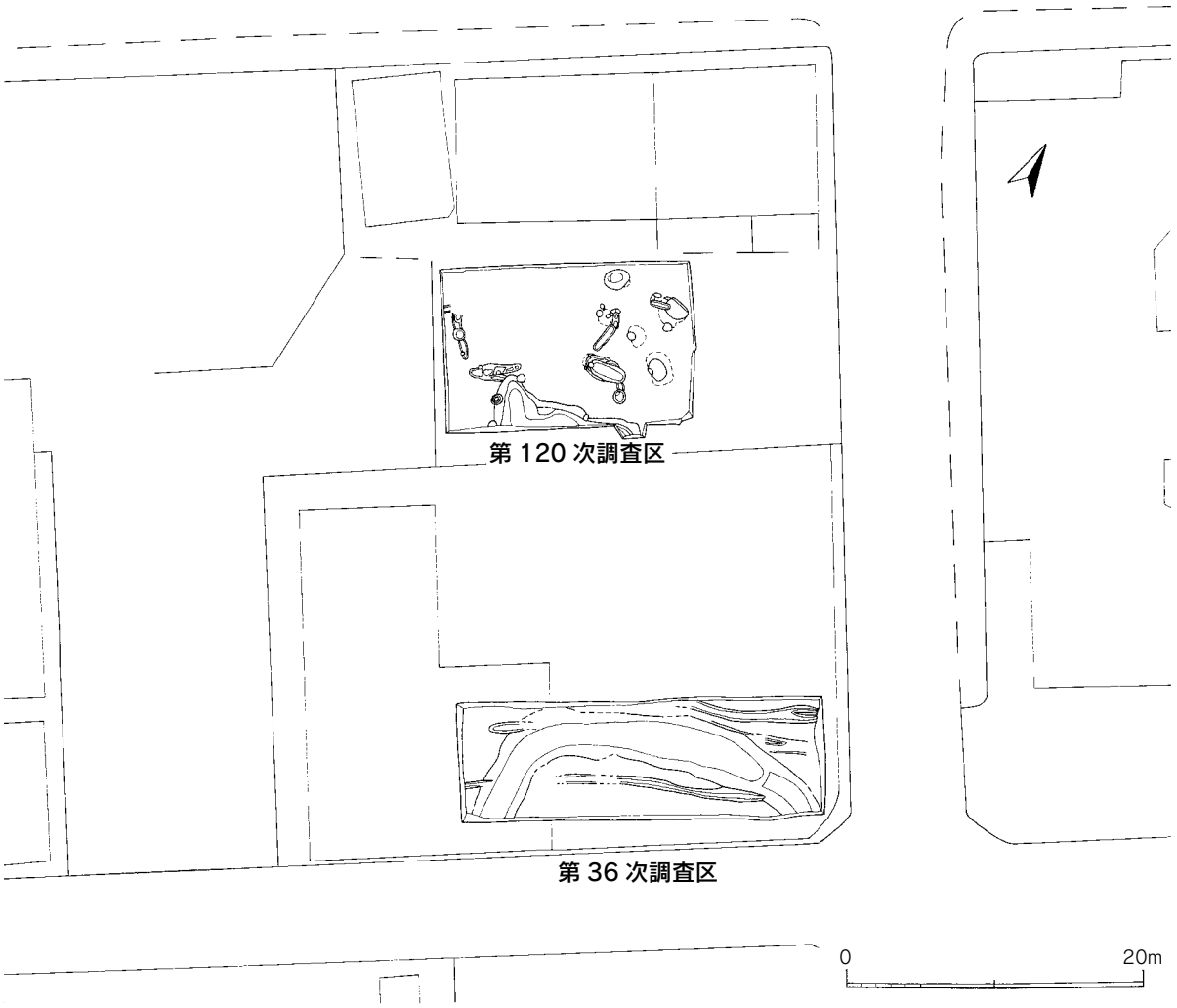


Fig. 4　第 120 次調査区周辺現況図（1 ／ 500）

Ⅱ．調査の記録

１． 調査の概要

第１２０次調査区は、比恵遺跡群の南西部にあり、1933 年頃から始まった区画整理事業によって鳥栖ローム層上面まで大きく開削されており、標高は 6.7 ～ 6.8m である。試掘調査では、鳥栖ローム層の直上には、5 ～ 10cm の厚さで遺物包含層が薄く堆積しているが、本来的にはもっと厚い包含層が堆積していたものと考えられる。また、その層中には甕棺片が含まれていることから申請地内に甕棺墓がある可能性が考えられた。

発掘調査は、平成22（2010）年4月13日の表土層除去作業から始め、５月20日の埋め戻しをもって終了した。調査区は、道路に面した駐車場を除いた建物部分について設定し、排土を場内で処理する必要から調査区を南北に二分し、はじめに南半部から実施した。南半部の調査では、南壁に沿って溝状の遺構と甕棺墓（ST－01）を検出した。甕棺墓は、溝状遺構の西縁にあり、甕棺墓と重複する溝状遺構の西縁部には溝と土壙状の遺構が重複しているものと推測されたが、混入物に若干の差異があるものの土層的な明確な違いは最後まで把握することができなかった。一方、東側では古墳時代の土壙によって大きく削平された甕棺墓（ST － 03）

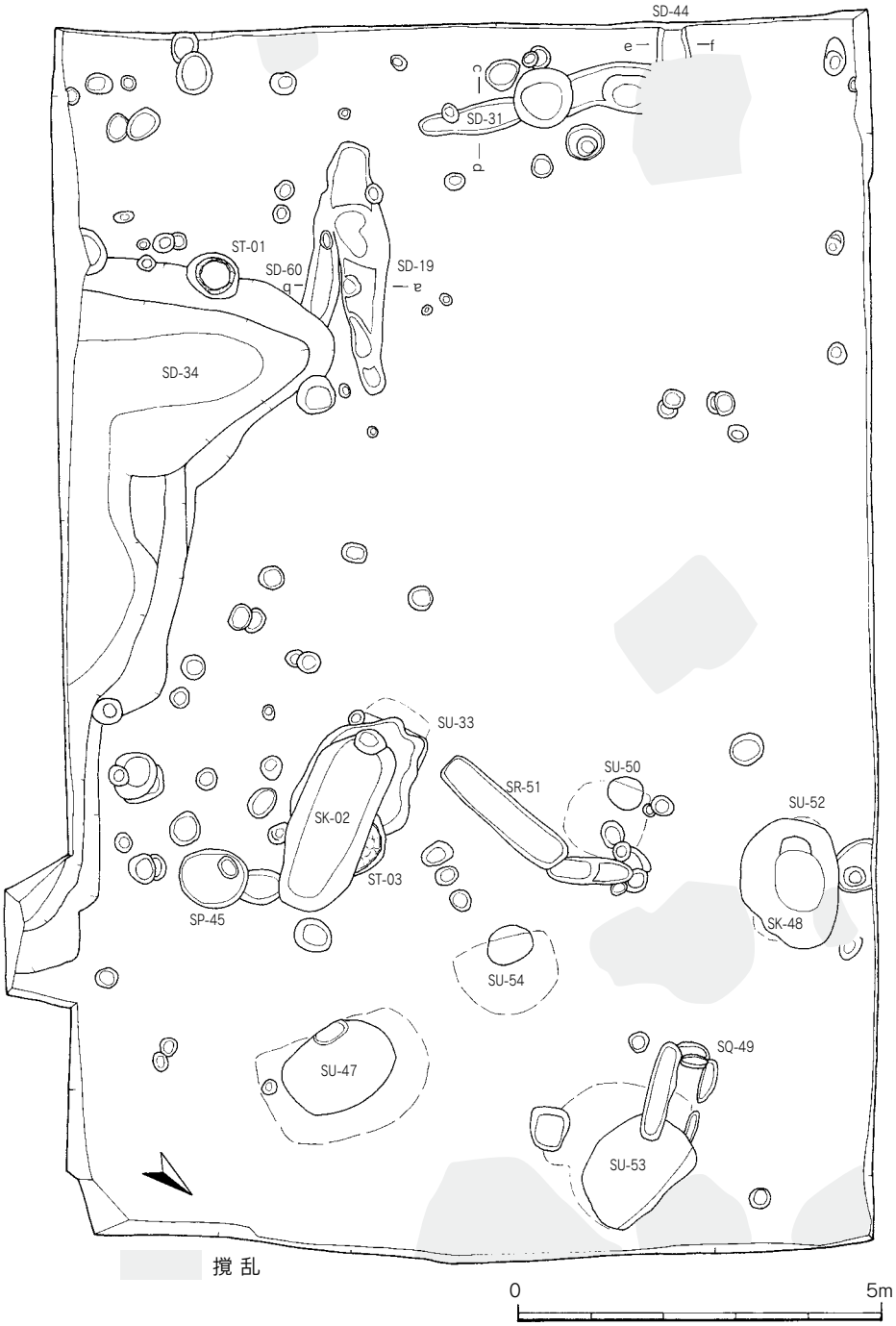


Fig. 5　遺構配置図（1 ／ 100）

を検出したが、その甕棺墓の下には黒色土層が拡がっており、甕棺墓の埋置に先立って更に古い遺構があることが予測され、結果的に土壙下にすっぽりと収まる貯蔵穴（SU－33）を検出した。次に、南半部の調査終了に伴い排土を反転して北半部の調査に着手した。その結果、４基の貯蔵穴と箱式石棺墓の棺材の抜き跡、土壙墓、土壙を検出した。このうち古墳時代の土壙墓（SR－51）からは楽浪系の陶質土器片が出土した。

発掘調査の結果、弥生時代前期と弥生時代中期後半～後期と古墳時代中頃の概ね３時代の集落域と墓地を構成する遺構を検出した。このうち弥生時代の遺構は、貯蔵穴からなる前期後半と中期後半～後期後半の土壙と甕棺墓が調査区の東半部に拡がっている。一方、古墳時代の遺構は、調査区の南縁部にある溝遺構と中頃の土壙墓が検出されたが、密度的にはきわめて疎らな分布を示している。

２．　これまでの調査

比恵遺跡群では、1933 年頃に始まった区画整理事業に伴う調査以来、これまでに 123 次にわたる発掘調査を実施している。博多駅南４丁目から６丁目を中心とする丘陵上には縄文時代晩期末から中世に至る各時代の遺構や遺物が多量に検出されている。殊に弥生時代から古墳時代にかけての遺構密度は非常に濃く、奴国の所在する福岡平野の中でも中心的な位置を占めいたことが容易に窺がえる。ここでは、本調査区での検出された貯蔵穴や甕棺墓などの弥生時代について概観してみたい。

はじめに、集落域の形成は縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけて開析されて複雑に入り組んだ台地の北側と西側で開始される。３次調査区では貯蔵穴が、その北側の 15・26・28 次調査区では前期末から中期初頭の円形住居や貯蔵穴が、４・30・31・37 次調査区では前期を中心とする貯蔵穴群が検出されている。中期になると集落域は台地の中央部へと拡大し、広い範囲に亘って形成されるようになる。中期後半になると大型の円形住居が出現し、50 次調査区では直径が 12.5m の超大型の円形住居が検出されている。後期には台地の中央部が中心的な集落域の範囲となり、掘立柱建物や柵列なども出現する。一方で、集落域全体を取り囲む環濠は明らかでないが、15・35・40・41・46・53 次調査区では中期後半から後期の大溝が確認されている。1 次調査区では小規模な単位集落を囲僥する隅丸方形の４つの溝（環濠）が確認されており、1 号溝が 30m、2 号溝が 40m、3 号溝が 70m、4 号溝が 90m と報告されている。

次に、掘立柱建物は台地中央部の７～50 次調査区の占地する４丁目一帯にかけて分布している。規模的には梁行 1 間、桁行 3 間のものが多く、桁行は 6 次調査区では 8.5m、27 次調査区では 7.5～8m、48 次調査区では 6.7m を測る。また、50 次調査区では梁行 1 間が 4m、桁行 3 間が 10m の建物が確認されている。これら建物跡は柱穴の掘方が大きく、床面に礎板を敷くものが多い。

更に、中期後半から後期末にかけて台地上では 300 基を超す井戸が開削される。その多くは群集して分布し、井戸底には完形の壷や高坏などのほか木製農耕具、木製容器、祭祀具などが投棄されている。中期後半には優美な丹塗りの袋状口縁壷や高坏、甕形土器などの祭祀土器が、後期後半には二重口縁壷などがまとまって出土するものがある。垂直分布的には井戸底、中位、更には上位でまとまり、土器・木器ともに時期的な器種の組成や型式編年を考える上で貴重な資料となる。

これらの集落域を構成する人々の墳墓域は、住居跡や建物群の周辺域に営まれるが、その中心的な甕棺墓や土壙墓群が４１・３・４・６次調査区を中心とする４丁目周辺に営まれている。このうち６次調査区の甕棺墓には絹布に包まれた細型銅剣が副葬されており、集落の中心的人物の甕棺墓と考えられる。また、これらの甕棺墓群は墳丘墓内に埋置されていたことが指摘されている。

一方、特記される遺物としては、青銅器の鋳型がある。３０次調査区では両面に中細銅戈と中細銅

矛を彫り込んだ鋳型が、42・50・109 次調査区などからは中細や広形の銅戈や銅矛の鋳型のほか 6 次調査区ではガラス滓が出土している。併せて、40 次調査区では青銅器の鋳造工具である取瓶や坩堝片が出土しており、青銅器やガラス製品の鋳造に携わる工人集団が居たことを示している。同時にこれらによって製造されたであろう銅鏃や青銅鋤先、鉄鏃、鉄斧などが 5・6・9・17・18・26・32・33・35・42・48・51・53・57 次調査区から出土している。

次数	調査番号	所在地	調査面積（㎡）	調査期間	報告書	時代	主な遺構	特記する遺物
1	3801	駅南4丁目		193805～193901	0	弥生～中世	環溝	弥生土器・土師器・須恵器・陶器・石器
2	5201	駅南4丁目	800.0	19520204～195204	94			
3	6604	駅南5丁目		1966・1967・1968	4=1007			
4	7908	博多駅南1丁目	1,300.0	19541113～19550420	2013			
5	8141	博多駅南4丁目	1,600.0	19560415～19560731				
6	8228	博多駅南4丁目405-1	2,644.0	19570506～19570905	94.13	弥生～古墳	甕棺墓・土壙墓・竪穴住居・掘立柱建物・井戸・方形周溝墓・古墳	甕棺・銅剣・たま・弥生土器・土師器・須恵器・石器・木器
7	8329	博多駅南4丁目10番	2,100.0	10580720～19581130	117	弥生～古墳		腹角製
8	8330	博多駅南5丁目12	2,240.0	19590117～19590418	116	弥生～古代	貯蔵穴・甕棺墓・住居・井戸・3本柵列・倉庫群	甕棺・弥生土器・須恵器
9	8503	博多駅南6丁目6-5	1,863.0	19600719～19601022	145	弥生～古墳	溝・井戸・土坑・竪穴住居・掘立柱建物	弥生土器・土師器・石器・木製品
10	8504	博多駅南6丁目39	555.0	19600916～19601001	145	弥生～古墳	井戸・溝	弥生土器・土師器・石器・木製品
11	8540	博多駅南6丁目18番9	580.0	19610220～19610331	146			土器、石器
12	8616	博多駅南4丁目11-35	279.0	19610712～19610731	174	弥生	竪穴住居・掘立柱建物・溝	弥生土器
13	8617	博多駅南4丁目159-3	496.0	19610714～19610917	596	弥生～古墳	井戸・掘立柱建物・柵列・溝	弥生土器・石器・土師器
14	8635	博多駅南6丁目9-7	284.0	19610807～19610828	174	弥生～古墳	井戸・土壙・竪穴住居	弥生土器・石器
15	8636	博多駅南6丁目9-6	278.0	19610805～19610927	290・596	弥生～古墳	井戸・溝・	弥生土器・土師器
16	8637	博多駅南4丁目8-15	202.0	19610916～19611011	174		甕棺墓・竪穴住居・古墳の周溝	弥生土器・甕棺・土師器・須恵器・石器
17	8717	博多駅南4丁目117-2外4筆	405.0	19620629～19620728	227	弥生～古墳	竪穴住居・井戸・比恵1号墳周溝	弥生土器・石器・木器・銅鏡
18	8820	博多駅南6丁目10-36	410.0	29630618～19630831	227		竪穴住居・掘立柱建物・井戸・貯蔵穴	弥生土器・須恵器・石器・木器・玉・青銅器
19	8828	博多駅南4丁目88	670.0	19630803～19631008	255	弥生～古代	竪穴住居・掘立柱建物・柵列・土壙・井戸・溝	弥生土器・須恵器・石器
20	8859	博多駅南4丁目19-2	252.0	19890206～19890228	227	弥生	井戸・土壙・箱式石棺墓・	弥生土器・石器
21	8863	博多駅前6丁目9-6	168.0	19890313～19890329	596	弥生～古墳	竪穴住居・掘立柱建物・溝	弥生土器・土師器・須恵器・石器・銅滓・炉壁
22	8903	博多駅南4丁目19-2	215.0	19890411～19890520				
23	8909	博多駅南5丁目40-1	88.0	19890418～19890423	227	弥生	井戸・溝・	弥生土器
24	8917	博多駅南3丁目317	340.0	19890523～19890619	255	弥生	水溜状遺構・土壙・	弥生土器・石器・木器
25	8924	博多駅南3丁目1-1	400.0	19890619～19890904	255	弥生	竪穴住居・土壙	弥生土器・石器・木器・土製品
26	8939	博多駅南3丁目58	482.0	19890807～19890923	255	弥生	溜池・溝・竪穴住居・	弥生土器・石器・木器・土製品
27	8971	博多駅南4丁目10-18	165.0	19900208～19900228	255	弥生～古墳	竪穴住居・掘立柱建物・溝・井戸	弥生土器・土師器・木製品
28	8981	博多駅南3丁目426	405.0	19900314～19900407	255	弥生	土壙	弥生土器・石器
29	9004	博多駅南3丁目29	120.0	19900410～19900428	289	弥生・中世	水田	弥生土器
30	9012	博多駅南4丁目221	570.0	19900519～19900620	289	弥生～古墳	貯蔵穴・井戸・竪穴住居・溝・掘立柱建物	弥生土器・須恵器・石器・鋳型・木器
31	9016	博多駅南4丁目201	530.0	19900621～19900713	289	弥生～古墳	貯蔵穴・井戸・溝	弥生土器・土師器・須恵器・石器
32	9037	博多駅南3丁目46-1他	159.0	19900925～19901113	289	弥生	包含層	弥生土器・石器・木器・銅鏡
33	9039	博多駅南4丁目150-3	1,130.0	19901004～19910208				
34	9043	博多駅南4丁目462-1	80.0	19901105～19901116	289	弥生	溝・土坑・	弥生土器・石器・木器
35	9061	博多駅南4丁目109-1	370.0	19910218～19910323	289	弥生	溝	弥生土器・銅鐸・木器
36	9064	博多駅南6丁目30-2	265.0	19910308～19910331	289	古墳	溝・柱	土師器・須恵器・埴輪・石器・埴輪・玉
37	9104	博多駅南4丁目221	170.0	19910422～19910523	325	弥生	貯蔵穴	弥生土器・石器
38	9109	博多駅南3丁目2-22	70.0	19910515～19910517	年報6			
39	9134	博多駅南4丁目162-5	210.0	19911129～19911213	325	弥生～古墳	竪穴住居・土壙・柵・掘立柱建物	弥生土器・須恵器・石器
40	9207	博多駅南4丁目72他	460.0	19920416～19920624	368	弥生～古墳	掘立柱建物・井戸・溝・土壙・水田	弥生土器・土師器・須恵器・石器・取瓶・木製品
41	9211	博多駅南6丁目34-2	1,037.0	19920516～19921130	401		掘立柱建物・土坑・	弥生土器・土師器・須恵器・石器・木器
42	9221	博多駅南4丁目6-23	756.0	19920706～19921113	368	弥生～古墳	井戸・竪穴住居・掘立柱建物・土壙・溝・方形周溝墓	弥生土器・土師器・須恵器・石器・鋳型・木製品
43	9229	博多駅南4丁目154-3他	614.0	19920820～19921130	453	弥生～古墳	竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土壙	弥生土器・石器・管玉・木器・木製品
44	9231	博多駅南4	40.0	19920827～19920905	368	弥生～古墳	井戸・土坑	弥生土器・土師器・石器・木製品
45	9237	博多駅南6丁目24-1	344.0	19920928～19921031	402	古墳	竪穴住居・掘立柱建物・井戸・溝	土師器・須恵器・玉
46	9240	博多駅南6丁目13-2	388.7	19921022～19921212	403	弥生～中世	土坑・井戸・溝	弥生土器・土師器・須恵器・石器・玉・陶磁器
47	9245	博多駅南5丁目11	120.0	19921009～19921025	369	弥生～古墳	土壙	土師器・石器
48	9255	博多駅南4丁目72他	850.0	19930106～19930331	368	弥生～古墳	掘立柱建物・井戸・溝・土壙	弥生土器・土師器・須恵器・陶質土器・石器・木製品・銅鏡
49	9318	博多駅前5丁目53-1	464.0	19930624～19930805	401	弥生～古墳	溝・竪穴住居・掘立柱建物・井戸	弥生土器・土師器・須恵器・石器
50	9329	博多駅南4丁目49	4,662.0	19930809～19940430	451	弥生～古墳	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・井戸・溝	弥生土器・はじき・須恵器・鋳型
51	9334	博多駅南4丁目86	1,401.0	19930906～19940309	452	弥生～古墳	掘立柱建物・竪穴住居・溝・井戸・木棺墓	弥生土器・土師器・須恵器・石器・鋳造鉄斧
52	9361	博多駅南5丁目18	682.0	19940216～19940315	404	弥生～古墳	溝・土壙	弥生土器・土師器・石器
53	9415	駅前6丁目7-27	1,095.4	19940524～19940922	451	弥生～中世	竪穴住居・掘立柱建物・井戸	弥生土器・土師器・須恵器・石器・火キリ口・鉄器・青銅器
54	9443	博多駅南4丁目15-3	187.0	19941011～19941122	520	弥生～古墳	井戸・竪穴住居・掘立柱建物・土壙	弥生土器・土師器・石器・鉄器・赤彩有線刻画木製品
55	9461	博多駅南6丁目16-2	390.0	19950213～19950322	442	弥生～古墳	溝・住居・井戸・土壙	弥生土器・土師器・須恵器・石器
56	9525	駅南4丁目18-29	524.0	19950907～19951024	520	弥生・古代	竪穴住居・掘立柱建物	弥生土器・石器・陶磁器
57	9541	博多駅南6丁目11-4外	2,050.0	19951120～19960223	530	弥生～中世	竪穴住居・掘立柱建物・井戸・溝・土坑	弥生土器・須恵器・土師器・鉄器・陶磁器・石器

Tab. 1　比恵遺跡群発掘調査一覧表　1

次数	調査番号	所在地	調査面積（㎡）	調査期間	報告書	時代	主な遺構	特記する遺物
58	9601	博多駅南4丁目7番	736.0	19960401～19960625	561	弥生	掘立柱建物・井戸・土坑・溝	弥生土器・石器・木製品・銅鏃
59	9627	博多駅前4丁目120-1	131.0	19960731～19960826	562	弥生～古墳	井戸・溝・土坑	弥生土器・土師器・石器
60	9668	博多駅南5丁目89外	402.0	19970127～19970331	562	弥生～中世	竪穴住居・甕棺墓・土壙墓・井戸・溝	弥生土器・土師器・石器・甕棺・白磁・
61	9673	博多駅南6丁目62番1.62番外	273.0	19970303～19970324	562	弥生～古墳	溝・井戸・土坑	弥生土器・土師器
62	9720	博多駅南6丁目25-1	370.0	19970609～19970903	595	弥生～古代	住居・土坑・甕棺墓・溝	弥生土器・須恵器・土師器
63	9739	博多駅南6丁目17-5	174.5	19970906～19971003	595	弥生～古代	道路上遺構・住居・井戸・	弥生土器・須恵器・土師器
64	9769	博多駅南5丁目12-32	143.7	19980204～19980210				
65	9772	博多駅南5丁目10-7	97.9	19980216～19980302	595	弥生	溝・土坑	っよいどき・石器・玉
66	9834	博多駅南5丁目	212.3	19980925～19981007				
67	9907	博多駅南6丁目81	200.0	19990512～19990614	770	弥生～中世	掘立柱建物・土坑・井戸・溝	弥生土器・土師器・須恵器
68	9912	博多駅南3丁目3-33	284.0	19990517～19990618	793			
69	9925	博多駅南5丁目109	150.0	19990628～19990715	671	弥生	貯蔵穴・井戸	弥生土器・石器・辰砂
70	9942	博多駅南4丁目99	313.8	19990101～19991115	671	弥生～古墳	竪穴住居・掘立柱建物・溝・井戸	弥生土器・石器・鉄製品
71	9955	山王1丁目150・152-1・153	592.6	19991206～20000301	671	弥生～中世	竪穴住居・掘立柱建物・溝・井戸	弥生土器・石器
72	0009	博多駅南5丁目71-14ほか	1,874.0	20000509～20000919	663	弥生～中世	貯蔵穴・井戸・竪穴住居・甕棺墓・柵状遺構・総柱建物・土坑墓	
73	0065	博多駅南5丁目39－1	100.0	20010301～20010307				
74	0101	博多駅南6丁目18-2	365.0	20010402～20010531	820	弥生～平安末期	掘立柱建物・井戸・土坑・溝	弥生土器・土師器・須恵器
75	0121	博多駅南5丁目3番	51.8	20010822～20010829	年報16			
76	0127	博多駅南6丁目64-1	110.0	20011101～20011029	771	弥生～古墳	竪穴住居・掘立柱建物・土坑	弥生土器・土師器・須恵器・ノミ状鉄製品
77	0135	博多駅南4丁目132	250.0	20011112～20011210	771	弥生～古墳	井戸・土坑	弥生土器・土師器・石器
78	0207	山王2丁目53-1・51	57.8	20020415～20020424	年報17			
79	0233	山王2丁目17-2、44	880.0	20020904～20021204	821	弥生・中世	竪穴住居・掘立柱建物・井戸・溝	弥生土器・須恵器・土師器・木器・石器
80	0235	博多駅南3丁目50番	165.7	20020924～20021122	822	弥生	包含層	弥生土器・石器・木器・木製品
81	0239	博多駅南4丁目118、189	486.0	20021015～20021015	782	弥生～古墳	溝・土壙・木材集積遺構	弥生土器・土師器・石器・木器
82	0308	博多駅南6丁目9番7	1,360.0	20030508～20030813	832	弥生～古墳	竪穴住居・井戸・溝・土壙	弥生土器・須恵器・土師器・木器・石器
83	0312	山王1丁目152	273.0	20030512～20030713	855	弥生～古代	竪穴住居・掘立柱建物・水路	土師器・須恵器
84	0317	博多駅南5丁目42番	198.3	20030522～20030605	年報18			
85	0321	博多駅南3丁目58	290.0	20030604～20030731	856	弥生・中世	竪穴住居・貯蔵穴・溜池？・溝	弥生土器・石器
86	0324	山王1丁目104-1、105、129-1	115.6	20030626～20030702				
87	0353	博多駅南6丁目9-4	1,402.0	20031104～20040120	857	弥生～古代	井戸・溝	弥生土器・土師器・須恵器・木器
88	0354	博多駅南6丁目9-7	29.0	20031112～20031113	年報18			弥生土器・土師器・須恵器
89	0355	博多駅南4丁目124-1	250.0	20031119～20031210				
90	0364	博多駅南4丁目222	332.1	20040121～20040305	858	弥生～古墳	竪穴住居・貯蔵穴・溝	弥生土器・土師器・石器
91	0401	博多駅南4丁目168-1、168-2	378.0	20040401～20040604	898	弥生～古墳	竪穴住居・土壙・溝	弥生土器・土師器・石器・小型ボウ製鏡
92	0447	博多駅南5丁目108-4	74.9	20040803～10040903				
93	0449	博多駅南4丁目217-1、217-4	89.0	20040915～20041007				
94	0450	博多駅南4丁目220の一部	36.0	20040915～20040922	年報19			
95	0467	山王1丁目10-31	315.0	20041201～20041216	899	弥生	井戸	弥生土器・木器
96	0478	博多駅南4丁目43～48	42.0	20050117～20050117	年報19			
97	0480	博多駅南5丁目133、134	242.0	20050201～20050308	900	弥生～古代	井戸・大型建物	弥生土器・須恵器・土師器
98	0501	博多駅南3丁目432	157.0	20050401～20050422	954	弥生	竪穴住居・貯蔵穴・土坑	弥生土器・石器
99	0513	博多駅南6丁目24-1、25-2	462.0	20050425～20050708	955	弥生～古墳	竪穴住居・井戸・土壙・溝	弥生土器・土師器・須恵器・石器・鋳型・鋳造鉄製粉・玉
100	0522	博多駅南4丁目71-1、77	480.3	20050601～20050701	956	弥生～古代	井戸・溝・掘立柱建物・竪穴住居？	弥生土器・土師器・須恵器・木製品・植物遺存体
101	0526	博多駅南5丁目106-1、107	119.9	20050614～20050716	957	弥生	土坑(貯蔵穴)・井戸・柱穴群	弥生土器・石器
102	0532	博多駅南4丁目100-1、99-2	220.0	20050704～20050825	956	弥生～古墳	竪穴住居・井戸・土坑	弥生土器・古式土師器・石器・鉄器・ガラス玉
103	0548	博多駅南4丁目120-2	1.6	20051019～20051019	年報20			
104	0570	博多駅南5丁目114-1、114-3	264.0	20060120～20060317	958	弥生	ピット	弥生土器・甕棺・須恵器
105	0614	博多駅南5丁目145-2、145-3	95.4	20060522～20060610				
106	0622	山王1丁目165-1	192.0	20060612～20060810	1000	弥生～古墳	甕棺墓・溝	弥生土器・甕棺・土師器・紡錘車
107	0628	博多駅南5丁目132	122.8	20060703～20060725	1001	弥生	井戸・土坑	弥生土器・石器
108	0636	博多駅南4丁目132-1	92.9	20060801～20060816				
109	0644	博多駅南5丁目123-1、124-1	163.7	20060911～20061011	1002	弥生～古代	井戸跡、土壙、3本柱柵列、高床倉庫群	土器・木器・銅戈鋳型・ガラス小玉
110	0645	博多駅南4-237-1、223	571.7	20060913～20061115	1003	弥生～古墳	竪穴住居・松菊里住居・土坑・溝	弥生土器、古式土師器、石器、土製品
111	0666	博多駅南4丁目9-23	163.5	20070205～20070228	1004	弥生	掘立柱建物・溝・土壙	弥生土器
112	0745	博多駅南6丁目85-1,2	352.3	20071015～20071130	1049	弥生～古代	溝・土壙・井戸・粘土採掘坑	弥生土器、石器、青銅器、土師器、須恵器、瓦
113	0761	博多駅南4丁目122-1	158.2	20080110～20080218	1050	弥生～古墳	掘立柱建物・溝	土器、木器
114	0801	博多駅南3丁目59番	376.6	20080407～20080620	1096	弥生～中世	竪穴住居・溝・貯蔵穴・土坑・井戸	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器
115	0818	博多駅南3丁目60番外10筆	755.0	20080702～20081002	1097	弥生～古墳	貯蔵穴・竪穴住居・水路・柱	弥生土器、木器、石器
116	0822	博多駅南4丁目180番4	326.7	20080707～20080731	1098	弥生～古代	土坑・溝	弥生土器、土師器、須恵器、石器
117	0853	博多駅南3丁目34	386.6	20090118～20090311				弥生土器・土製品・木製品・石製品
118	0861	博多駅南6丁目6-2	192.0	20090225～20090312	1130			弥生土器・木製品・石器
119	0934	博多駅南4丁目166-1、166-2、	178.5	20100215～20100310				弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器
120	1004	博多駅南6丁目31-5	166	20100413～20100520	1132	弥生～古墳	貯蔵穴、甕棺墓、土壙墓、箱式石棺墓、土壙	弥生土器・須恵器・石器・鉄器・玉
121	1016	博多駅南3丁目445～451・466～	360.0	20110710～20100810				弥生土器・陶磁器・石器
122	1023	博多駅南4丁目202番		20100908～20101008				
123	1036	博多駅南4丁目103番、103番3		20110117～20110302				

Tab. 2　比恵遺跡群発掘調査一覧表　2

３．弥生時代の調査

弥生時代の遺構は、貯蔵穴６基と甕棺墓２基、箱式石棺墓１基、土壙１基、溝遺構１条と柱穴を検出した。これらの遺構は、甕棺墓１基と溝遺構が調査区の南辺に位置することを除けば、調査区の北東縁にまとまって分布する傾向が窺がえ、西半部には遺構はほとんど拡がっていない。ただし、調査区の狭小さを勘案するとこの傾向が周辺域の在り様を直ちに具現しているとは云い難い。このうち６基の貯蔵穴は、現状では調査区北東部の８m四方のきわめて狭い範囲に１m～２mの間隔で密集して分布しているが、調査区の東～北方に拡がっている可能性も考えられ、周辺地域での該期の集落域の展開と貯蔵穴群の分布を重ね併せて検討する必要がある。

１）貯蔵穴（SU）

３３号貯蔵穴井戸跡　SU－33　(Fig.7･PL.2)

３３号貯蔵穴は、調査区の北東部に群集する貯蔵穴群中の南西端に位置し、その上縁部は３号甕棺墓や２号土壙と重複し、その中で最も古い。床面の平面形は、東西長が 262cm、南北長が 122cm の長方形プランをなしている。床面積は、約 3.2㎡である。壁面は、南北壁と東壁は垂直に立ち上がるが、西壁は 20cm ほど更に奥へ向かって拡がった後に約 40°の傾斜をもって緩やかに立ち上がり、そこから大きく屈曲してドーム状に膨らみながら立ち上がる。また、北壁下の床面上には壁面に接して東西が 40cm、南北が 23cm、深さが 10cm ほどの浅いピットがあり、その東端に径が 10cm ～ 14cm、深さが 14cm の小さな杭状のピットが掘り込まれている。このピットに昇降具を架設した可能性が十分に考えられる。これらのことから断面形を復原すると、北壁のほぼ中央に入り口があり、その入り口に向かって東壁や南壁は西壁のようにドーム状に大きく膨らんでいたものと推測される。覆土は暗黒茶色土～黒色土で崩落した壁面土のロームブロックが層状に混入していた。遺物は、上層から弥生中期甕片と甕棺片がわずかに出土した。

４７号貯蔵穴　SU－４７（Fig. ７・８　PL. ２）

４７号貯蔵穴は、調査区北東部に拡がる貯蔵穴群中の北東端に位置し、１m西には５４号貯蔵穴が、また西南へ２mの距離には２号土壙や３号甕棺墓、３３号貯蔵穴がある。床面は、東西長が 229cm、南北長が 160cm で、南壁辺は直線的に延び、北・南・東壁辺は緩やかな弧状を描くように内湾する不整な半円形のプランを呈する。床面積は、約 3.65㎡である。壁面は南壁が垂直に立ち上がり、東西壁および北壁は床面から 30cm ほどの高さまでやや外湾気味に立ち上がり、そこから大きく屈曲してドーム状に膨らみながら立ち上がって天井部に至る。床面は南壁側低く、北壁側は 15cm ほど高くなる。また、垂直な南壁の中央部には、壁面に沿って長さが 47cm、幅が 25cm、深さが５～ 8cm の浅い楕円形の小ピットがあり、ここに昇降具を架設した可能性が考えられる。覆土は黒色土の単一層で、層中には崩落した天井壁のロームブロックが大き

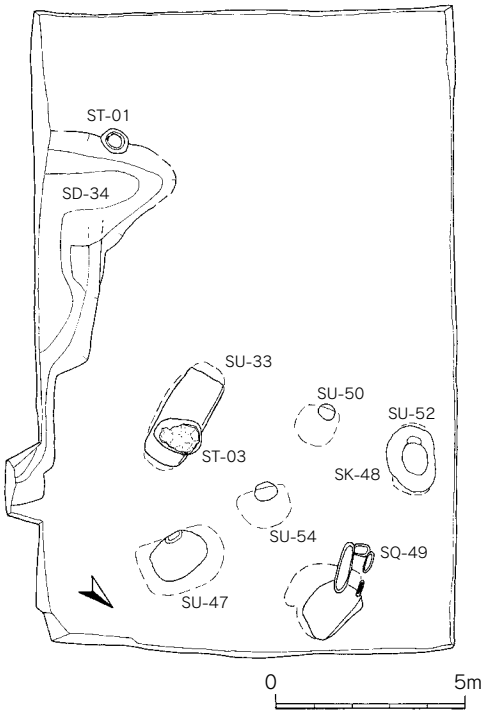


Fig. 6　弥生時代の遺構配置図（1 ／ 200）

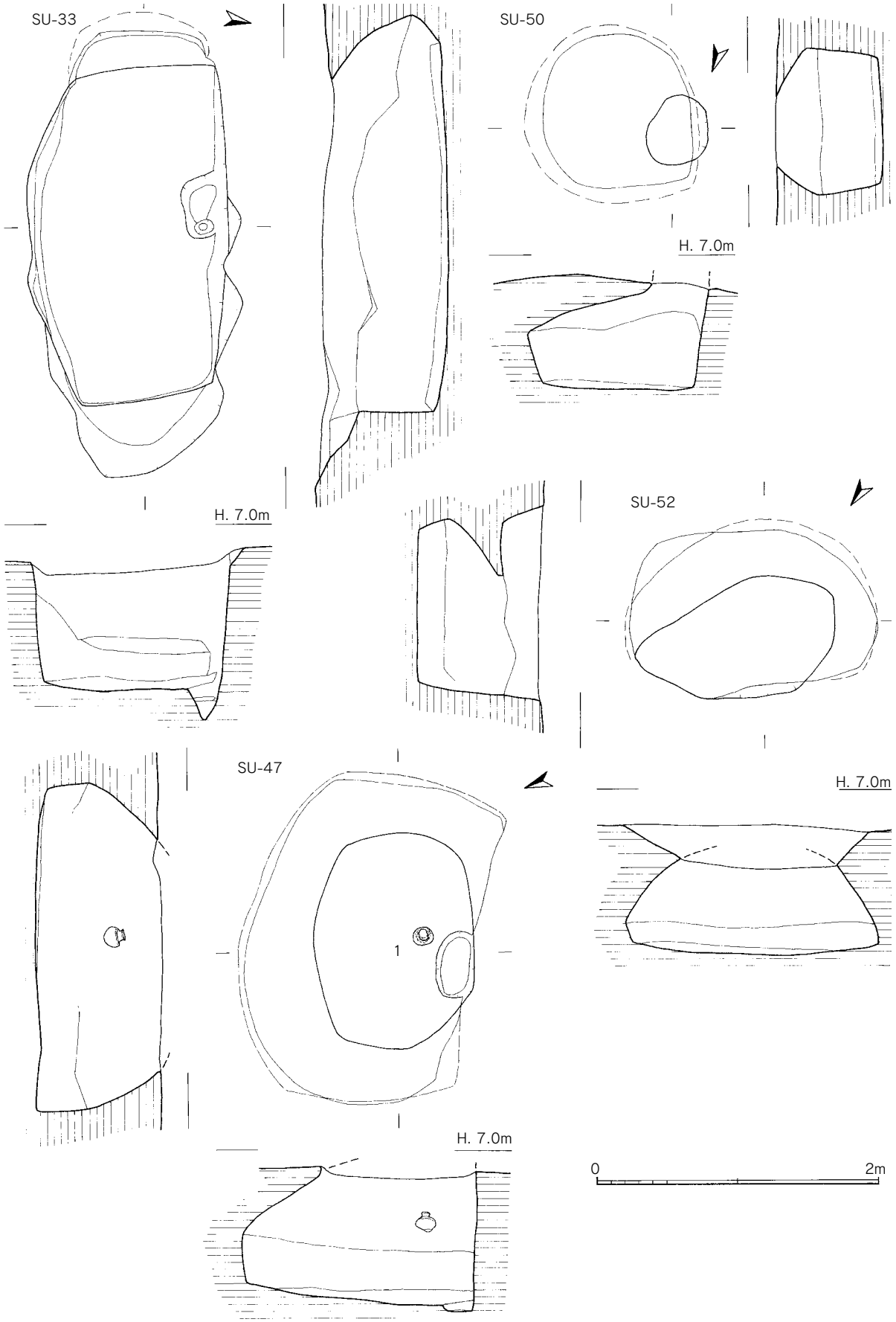


Fig. 7　33・47・50・52 号貯蔵穴実測図（1 ／ 40）

な塊で混入していた。遺物は、床面から45cmほどの所で前期後半の小型壷が出土した。

1は、口径が8.4cm、底径が6cm、器高が14.3cmの小型の壷である。口縁部は如意状をなし、頸部は緩やかに内傾する。胴部は撫肩の球形をなし、緩やかに膨らむ肩部には4条の細い横凹線に挟まれて3段の羽状文が施文され、更にその上段には1条に横凹線が巡っている。調整は、内面が凹圧ナデ、外面は丁口縁部〜頸部がヨコナデ〜粗い研磨、羽状文下は丁寧な横研磨で赤色顔料の付着痕があり、丹塗壷と考えられる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好。色調は淡褐色。

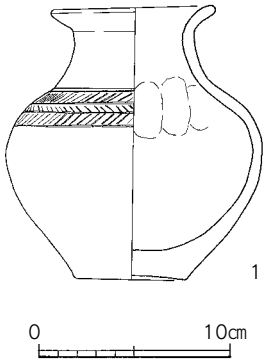


Fig.8　47号貯蔵穴出土遺物実測図（1／4）

５０号貯蔵穴　SU－50
（Fig. 7　PL. 3）

５０号貯蔵穴は、調査区の北東部に拡がる貯蔵穴群の中央部西端しに位置し、東へ1mの距離には５４号貯蔵穴が、北へ2mの距離には５２号貯蔵穴がある。床面の平面形は、南北長が115cm、東西長が105cmの不整円形プランをなす。壁面は、西壁が垂直に立ち上がるほかは床面より45〜55cmの高さまで外傾気味に立ち上がり、そこから大きく屈曲してドーム状に膨らみながら立ち上がる。西壁の中央部には、直径が45〜50cmの円形プランの昇降口がある。南北壁および東壁が屈曲点からドーム状に膨らむのに比べて西壁が屈曲点からやや外傾するのは昇降の便を図ったものと考えられる。床面は浅い凹レンズ状をなし、床面積は約1.8㎡である。覆土は、黒茶褐色土〜黒色土で、中央部には埋没時の天井壁崩落によるロームブロックの混入が見られた。遺物は壷や甕片がわずかに出土した。

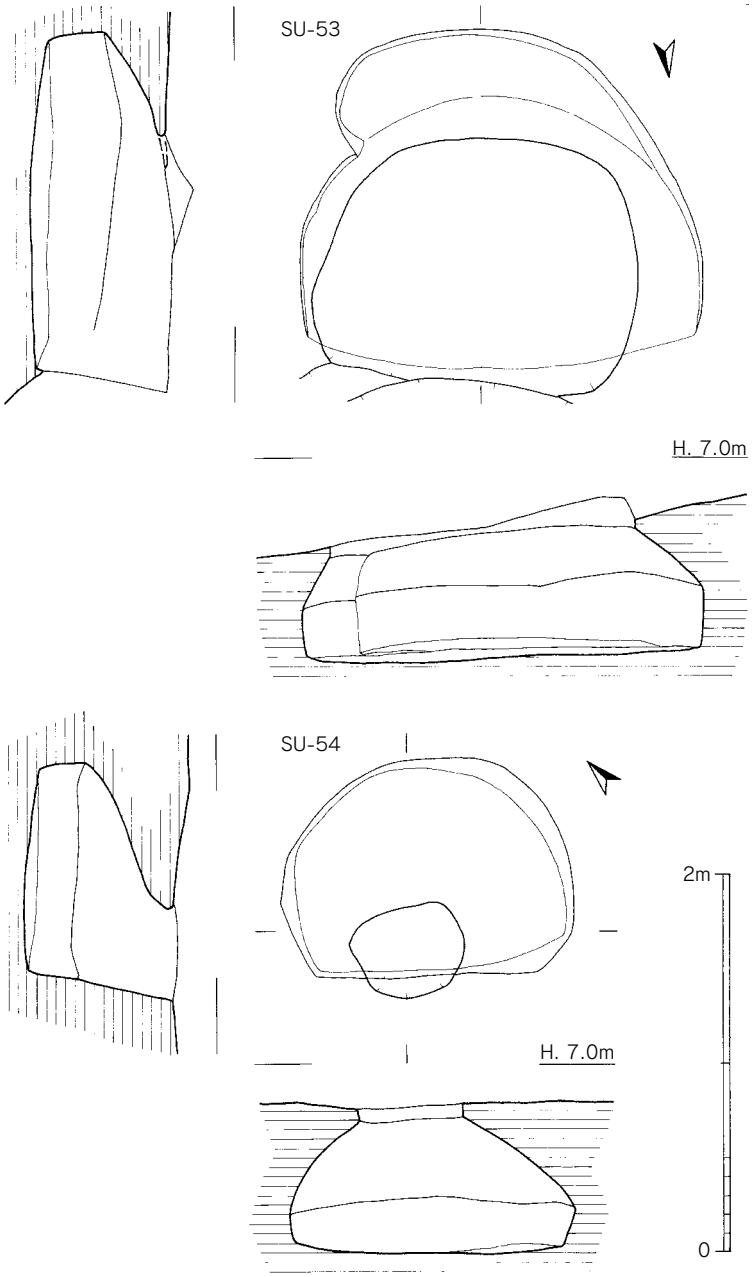


Fig. 9　53・54号貯蔵穴実測図（1／40）

５２号貯蔵穴　SU－52
（Fig. 7　PL. 3）

５２号貯蔵穴は、貯蔵穴群中の北西端にあり、上面は４８号土壙によって削平されている。床面の平面形は、東西長が177cm、南北長が108cmの不整な半円形プランをなし、床面積は約1.75㎡である。壁面は、北壁が垂直に立ち上がるが、半円形をなす東西と南側の壁面は、床面から20cmの高さまで緩やかに外傾して立ち上がり、そこから大きく屈曲してドーム状に膨らみながら天井部へと続く。入口は、垂直に立ち上がる北壁にあると考えられるが、昇降材の架設痕は確認できなかった。覆土は、屈曲部下が黒色土、屈曲部から天井部が黒茶褐色土で、壁際の層中には天井部の崩落によるロームブロックが多く混入していた。遺物は壷片や甕片がわずかに出土した。

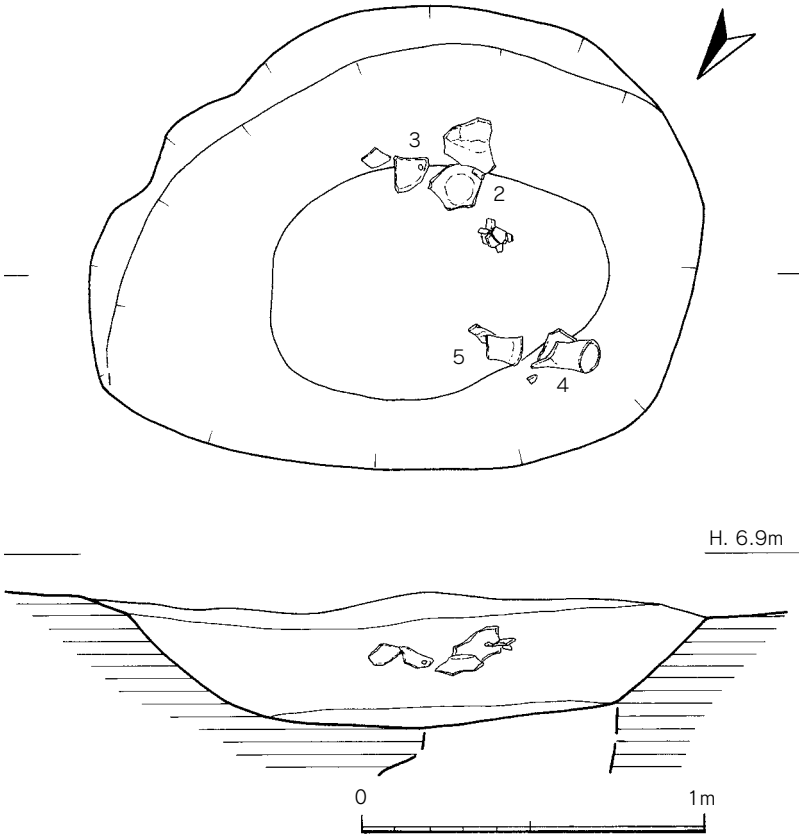


Fig. 10　48号土壙実測図（1／20）

５３号貯蔵穴　SU－53（Fig. 9　PL. 3）

５３号貯蔵穴は、群集する貯蔵穴の中で最北東端に位置し、南へ1mの距離には54号貯蔵穴がある。西壁の天井部上面には49号箱式石棺墓が掘り込まれている。床面の平面形は、東西長が208cm、南北177cmの不整な瓢状の半円形プランをなしている。床面は、はじめ南北長が145cmの半円形に掘られていたが、南壁側に何らかの不都合が生じたのか、そこから35cmほど奥へ掘り進めて床面の拡張を図っている為に東壁は瓢状に括れている。また、天井部の断面形は、拡張部の天井面に併せて

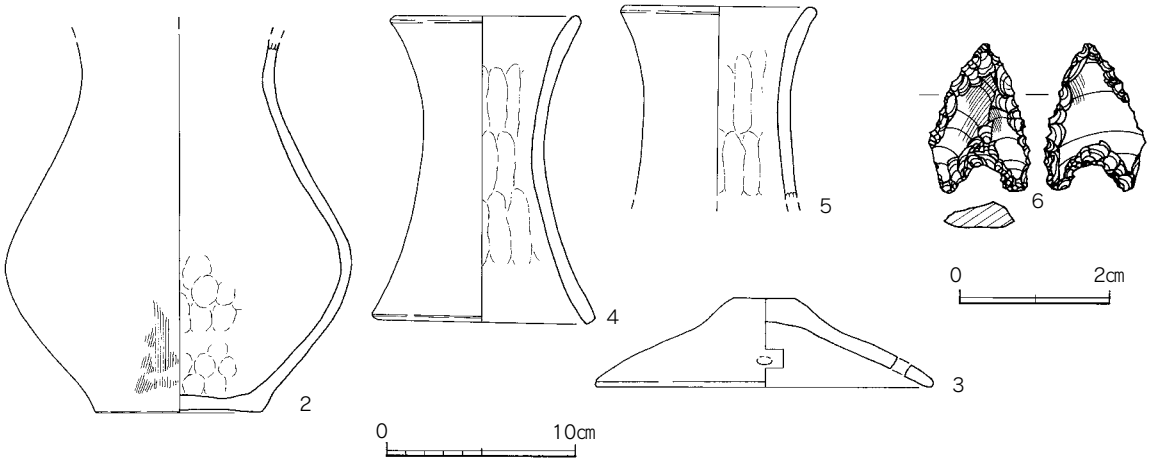


Fig. 11　48号土壙出土遺物実測図（1／4・1／1）

旧天井部を作り直しているが、一部に調整の不具合な面が遺存していた。この床面拡張の理由には天井部から壁面の崩落が考えられようか。床面積は約 2.9㎡である。壁面は、北壁がわずかに外傾して立ち上がるほかは、床面から 30 ～ 40cm の高さまでが緩やかに外傾して立ち上がり、そこから大きく屈曲してドーム状に膨らみながら天井部へと続いている。入口は、垂直に立ち上がる北壁にあったものと考えられるが、昇降材の架設痕は確認できなかった。覆土は、黒茶褐色土～暗黒色土で、弥生の壷片や甕片のほかに上層から須恵器大甕片が出土した。

５４号貯蔵穴　SU － 54（Fig.　9　PL. 3）

５４号貯蔵穴は、調査区の北東部に拡がる貯蔵穴群の中央に位置する。北東方には 53 号貯蔵穴が、南東方には 47 号貯蔵穴、北西方には 50 号貯蔵穴、南西方には 32 号貯蔵穴があり、これらの貯蔵穴に取り囲まれるように立地している。床面の平面形は、南北長が 142cm、東西長が 108cm の半円形プランをなし、床面積は約 1.3㎡である。壁面は、南壁がやや外傾しながら直線的に立ち上がる。一方、東西壁および北壁側は床面から 20 ～ 30cm の高さまで小さく外傾して立ち上がり、そこから大きく屈曲してドーム状に膨らみながら天井部へと続いている。入口部は、垂直に立ち上がる南壁にあると考えられるが、昇降材の架設痕は確認できなかった。覆土は、黒色軟質土の単一層で、壁際には天井部の崩落によるロームブロックが互層状に混入していた。遺物は弥生甕の小片がわずかに出土したのみである。

２）土　壙（SK）

４８号土壙　SK －４８（Fig.　10・11　PL. 5）

４８号土壙は、調査区の北東隅に位置し、東へ２ｍの距離には４９号箱式石棺墓がある。また、すぐ真下には５２号貯蔵穴の天井部がある。平面形は、長辺が 179cm、短辺が 135cm の楕円形プランを呈する。壁高が 40cm の壁面は、緩やかに立ち上がる。床面は、中央部が浅く凹レンズ状に窪み、断面形は緩やかなＵ字状をなす。覆土は、暗茶褐色土の単一層であるが、西壁下の床面上には５２号貯蔵穴の入口部が開口している。遺物は、床面より 15cm ほど上層で丹塗りの袋状口縁壷や無頸壷の蓋、器台などのほかに打製石鏃が出土した。

２は底径が 8.8cm、胴部最大径が 18.3cm の壷で胴部下半には丹彩痕が残り、器面全体に丹が塗布されていたと思われる。胴部は丸味を帯びた玉葱状をなし、短く緩やかに外反する頸部には袋状の口縁部が付こう。調整は内面がナデ

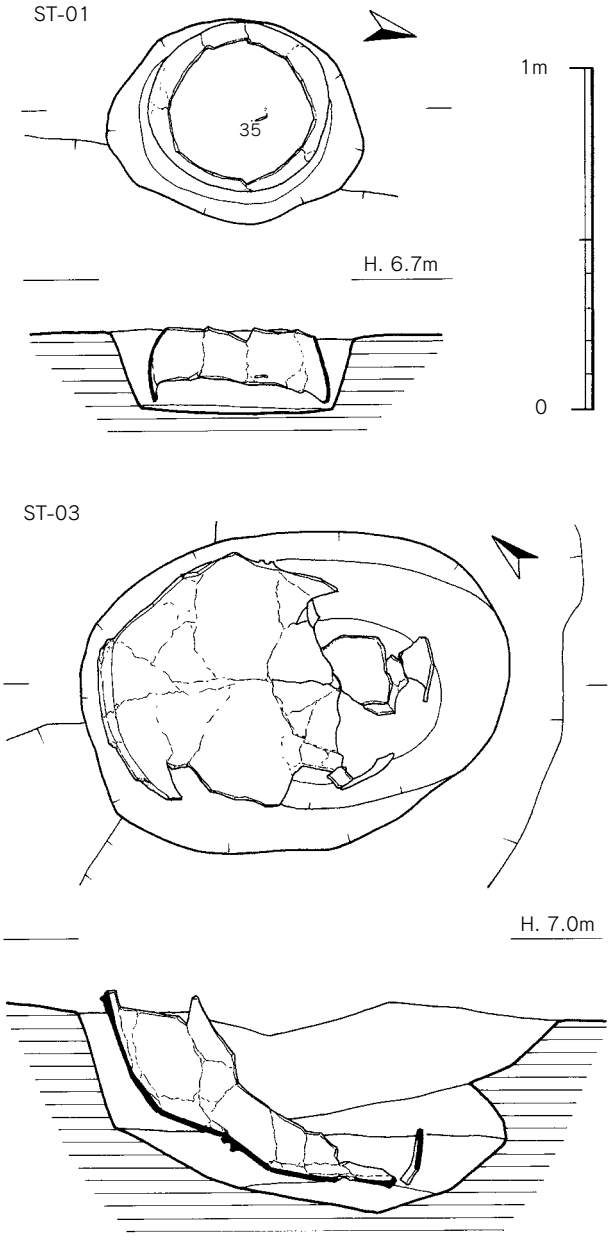


Fig. 12　1・3 号甕棺墓実測図（1 ／ 20）

～押圧ナデ、外面は細かいハケ目後に粗い研磨。胎土は精良で、微細砂～粗砂粒と赤褐色粒を含み、焼成は良好。色調は明赤褐色。3 は口径が 18cm、天井部径が 3.2cm、器高が 4.7cm の無頸壷の蓋である。口縁部は小さな底部からストレートに外反してのび、口縁部下には対称位に円孔を穿っている。胎土には小砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は淡明褐色。4・5 は円筒形の器台である。4 は口径が 10.6 ～ 10.9cm、底径 11.8cm、器高は 16 ～ 16.2cm のやや歪な器台である。口縁部と底部は筒状の体部から緩やかに外反して開き、口縁部端は丸く収まる。胎土は良質で、石英小砂～粗砂粒を多く含む。色調は、外面が明赤橙色、内面は淡橙色。5 は口径が 10.5cm の器台上半部である。胎土には微細砂～石英粗砂粒と雲母微細粒を多く含み、焼成は良好。色調は、外面が赤橙色、内面は淡黄橙色である。いずれも内面は指頭押圧ナデ調整。6 は長さが 2.0cm、基部幅が 1.35cm、基部厚が 0.35cm の剥片石鏃。黒曜石製。

3）甕棺墓（ST）

1 号甕棺墓　ST－０１　（Fig. 12・13　PL. 4・7）

1 号甕棺墓は、調査区の南隅にあり、３４号溝に削平された土壙状の遺構埋土上に掘り込まれている。甕棺は、口縁部から胴部上半を打ち欠いた甕型土器で、底部は削平を受けて消失している。墓壙は直径が 60cm×76cm の楕円形プランを呈し、墓壙底は中央部がやや窪む浅い凹レンズ状をなしている。甕棺はこの墓壙の西壁に寄せてコンパクトに埋置している。埋納法は打ち欠いた甕の上半部を下にして直立させたいわゆる倒置甕である。棺内からは鉄器の小片が出土した。

7 は、口縁部～胴部上半を打ち欠いた中型の甕で、胴部下半～底部は削平によって消失しているために細かい法量は判然としないが、最大胴径が 50.5cm で器高は 45 ～ 50cm ほどになろうか。胴部は倒卵形をなし、凸帯はないが口縁部下に三角凸帯が巡っていた可能性も考えられる。内外面ともに押圧ナデ後にやや粗いハケ目調整。胎土は良質で、小砂粒を含み、焼成は良好。色調は濃褐色。

3 号甕棺墓　ST－０３

（Fig. 12・13　PL. 4・7）

3 号甕棺墓は、調査区の東端に位置し、東へ 2m の距離には 47 号貯蔵穴がある。また、甕棺墓は、33 号貯蔵穴の天井部を掘り込み、甕の上半部は 2 号土壙によって大きく削平されている。墓壙は、長軸が 143cm、短軸が 93cm の楕円形プランを呈する。甕棺は、この墓壙底に約 10cm の厚さで暗茶褐色土を充填して甕の安定

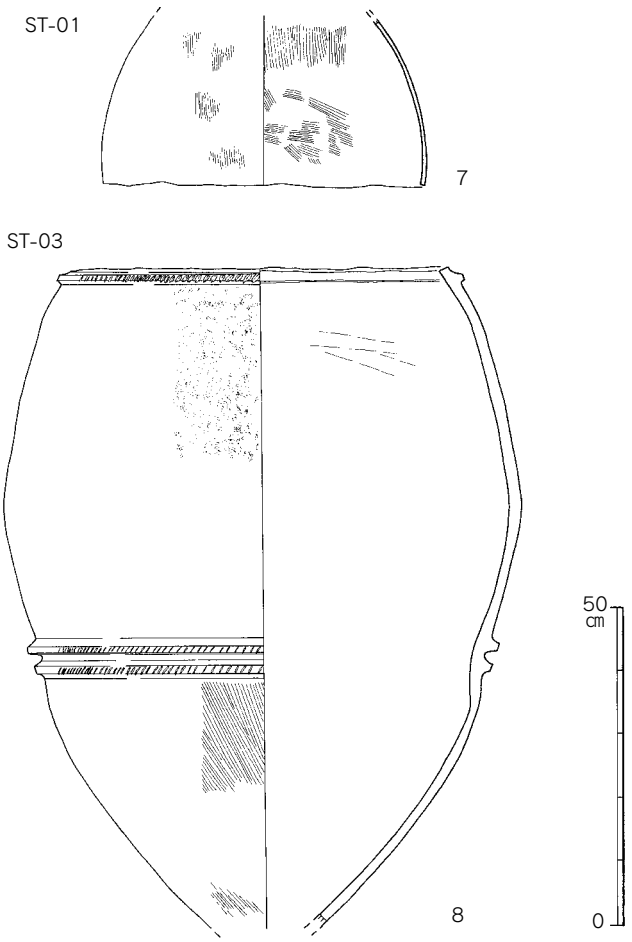


Fig. 13　1・3 号甕棺実測図（1 ／ 12）

を図り、約40°の傾斜角で埋置されている。主軸方位はN－38°－Wにとる。棺内には2号土壙の遺物が散見され、一方で2号土壙内には甕棺片が点在していた。

8は、「く」字状口縁の大型甕で、失われた「く」字状の口縁部下に1条、胴部下位に2条のコ字凸帯が巡っている。コ字凸帯にはヘラ状工具による斜めの線刻が施文されている。肉厚な胴部は、倒卵形をなし、2条のコ字凸帯部で大きく内に窄まり、やや瓢状に括れている。調整は、胴部上半部に叩き痕が残り、胴部凸帯下は更にその上には粗いハケ目を加えている。内面は押圧ナデで当具痕は確認できなかった。胎土はやや粗く砂粒と雲母を含み、焼成は堅緻。色調は明黄褐色。全体的に粗い作りの甕である。

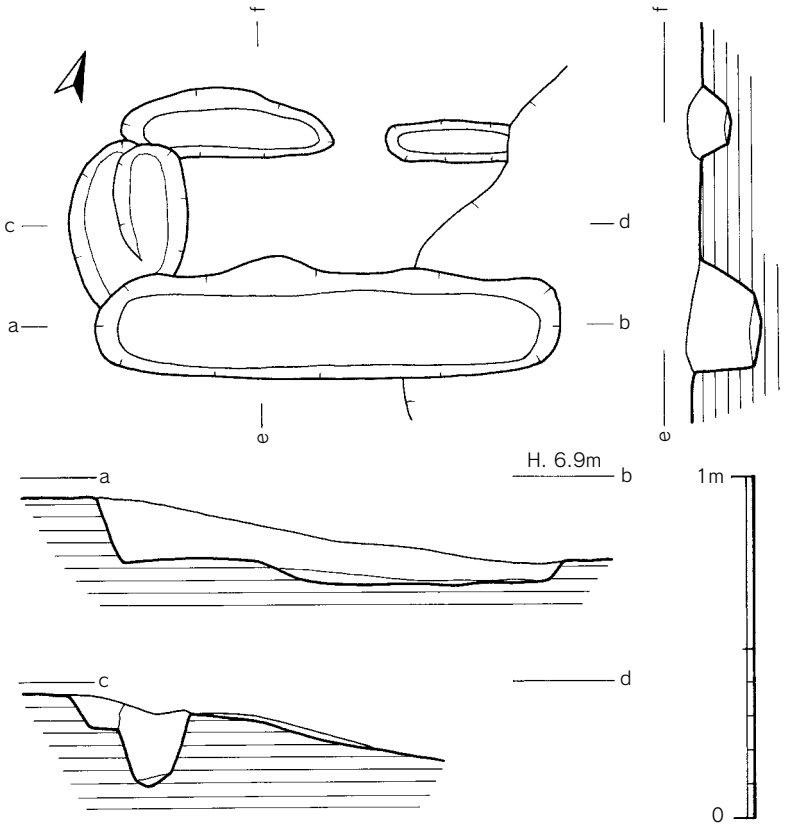


Fig. 14　49号石棺墓実測図（1／20）

4）箱式石棺墓（SQ）

49号箱式石棺墓　SQ－49（Fig. 14　PL. 4）

49号石棺墓は、調査区の北東端にあり、53号貯蔵穴の西壁天井部上に掘り込まれている。石棺材はすでに消失しているが、コ字状に掘り込まれた溝状の掘方の形状から箱式石棺墓と判断した。石棺は小口石を側壁石で挟み込むタイプで、石棺の内法は長軸が100～110cm、短軸が45～50cmに復原され、主軸方位をN－74°－Eにとる。また、側壁掘方の東側の埋土上にはベンガラがやや濃密に拡がっており、石棺の内面にベンガラが塗布されていた可能性が十分に考えられよう。掘方の埋土は暗茶色～暗褐色土。削平が著しく遺物は散見されなかった。

5）溝遺構（SD）

34号溝　SD－34（Fig. 15～18　PL.5～8）

34号溝は、調査区の南端にある東西方向の大溝であるが、大半が調査区外に拡がっているためにその全容は明らかではない。現状では長さが約10m、幅が約1.5～2mに復原され、東西の両端部は南にむかって矩形に屈曲しながらのびている。壁面は部分的に小さなフラット面を作りながらも緩やかに傾斜して立ち上がり、断面形は溝底が凹レンズ状をしたU字状をなしている。溝底から20cmほど上層には中期後半～終末期の壷や甕、鉢、高坏などが折り重なるように濃密に投棄されていたが全体的に器面の摩滅が著しい。一方で、溝の西端部は溝端から1.5mほど北へ張り出しがあり、この西端には1号甕棺墓が掘り込まれていて、時期的には齟齬がある。溝の西端部の埋土は、

おおむね暗黒茶色〜黒茶褐色土で黄褐色粘土粒の混入量の多寡と土質の硬軟に若干の差異が観察されるほかには明確な違いは判別できなかった。これははじめに北へ張り出した部分に土壙状の遺構があり、その埋没後に1号甕棺墓が埋置されたことが考えられる。そして更にその後に大溝の34号溝が開削されるが、その西端は1号甕棺墓の墓壙手前で立ち上がっていると考えられ、土質的にも若干ながらその傾向が窺がえ、そのように考えるのが合理的であろう。また、遺物には土器のほかに碧玉製管玉と鉄器片が出土している。

9は、口径が10.2cm、器高が15cmの二重口縁壷である。口縁部は、胴部から短く内傾する頸部から大きく外反して立ち上がり、一旦屈曲して直口気味に小さく外反する。口縁端部は、外方に小さく摘み出して上面を水平に仕上げている。胴部は丸底の球形であるが、底部は直径が2.5cmほどの平底状をなしている。調整は、口縁部がヨコナデ、頸部と内面は指頭押圧ナデ、外面はナデ。胴部下半には焼成後に楕円形孔が穿たれ、内面には炭化物が付着している。胎土は粗く、石英細砂〜粗砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は淡黄褐色。10は底径が6cmの小型壷である。球形の胴部は肉厚で、厚い平底の底部が付く。口縁部は短く「く」字状に外反する。外面には赤色顔料痕が残り、内面は指頭押圧後にナデ〜タテハケ目。胎土には微細砂粒〜小砂粒のほかに石英中砂粒と雲母微細粒を含む。色調は明橙色。11・12は長頸壷である。11は、口径が8.4〜8.6cm、底径が4〜4.2cm、器高が20.6cm。胴部は肩の張った偏球形で、底部は上底状をなしている。頸部は、偏球形の胴部から小さく内傾した後に小さく屈曲して緩やかに外反しながら立ち上がる。口縁端部は丸く整えている。調整は、口頸部外面が細かいタテハケ目、内面は押圧ナデで下半部には絞り痕がある。胴部は、内面上半部が指頭押圧後にヨコ方向のハケ目、底面にはタテ方向のハケ目調整。胎土は精良で、微細〜小砂粒と雲母微細を多く含み、焼成は良好。色調は、内面が淡橙〜白橙色、外面は淡橙色。12は、胴部最大径が16.6cmの長頸壷の胴部である。胴部は偏球形で、底部は丸底である。調整は内面が押圧ナデ、外面はナデ後にハケ目調整で仕上げた後に胴部上半部にはタテ、中位にはヨコにやや粗い研磨が施されている。胎土は良質で、微細砂粒〜石英小砂粒を比較的多く含み、焼成は良好。色調は淡明赤橙色。13は、口径が18cm、現存項が7.7cm

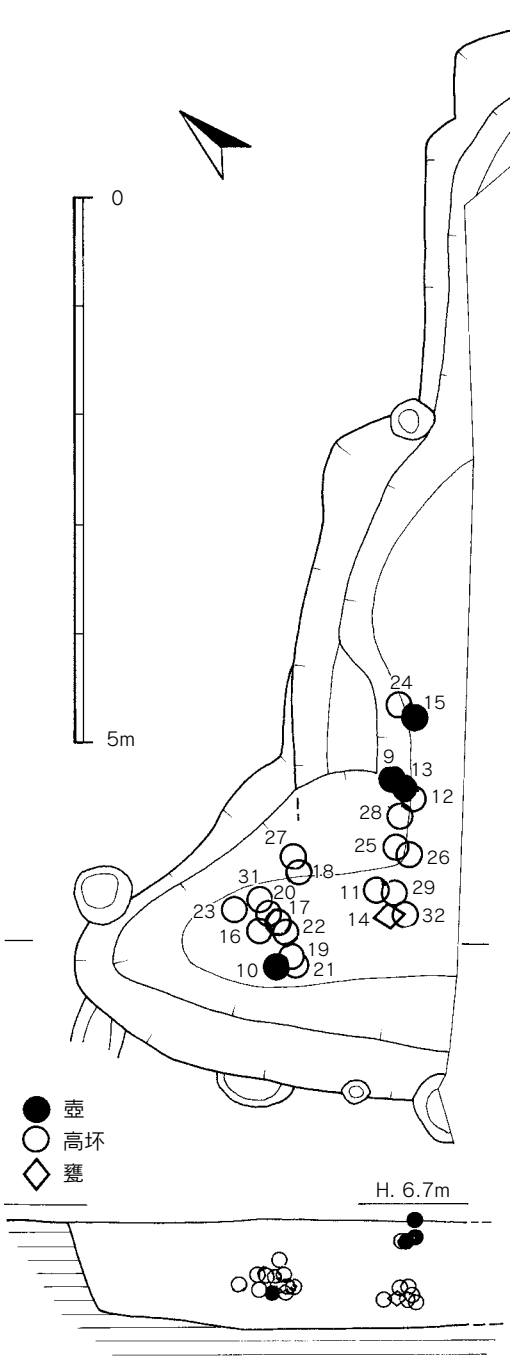


Fig. 15　34号溝実測図（1／70）

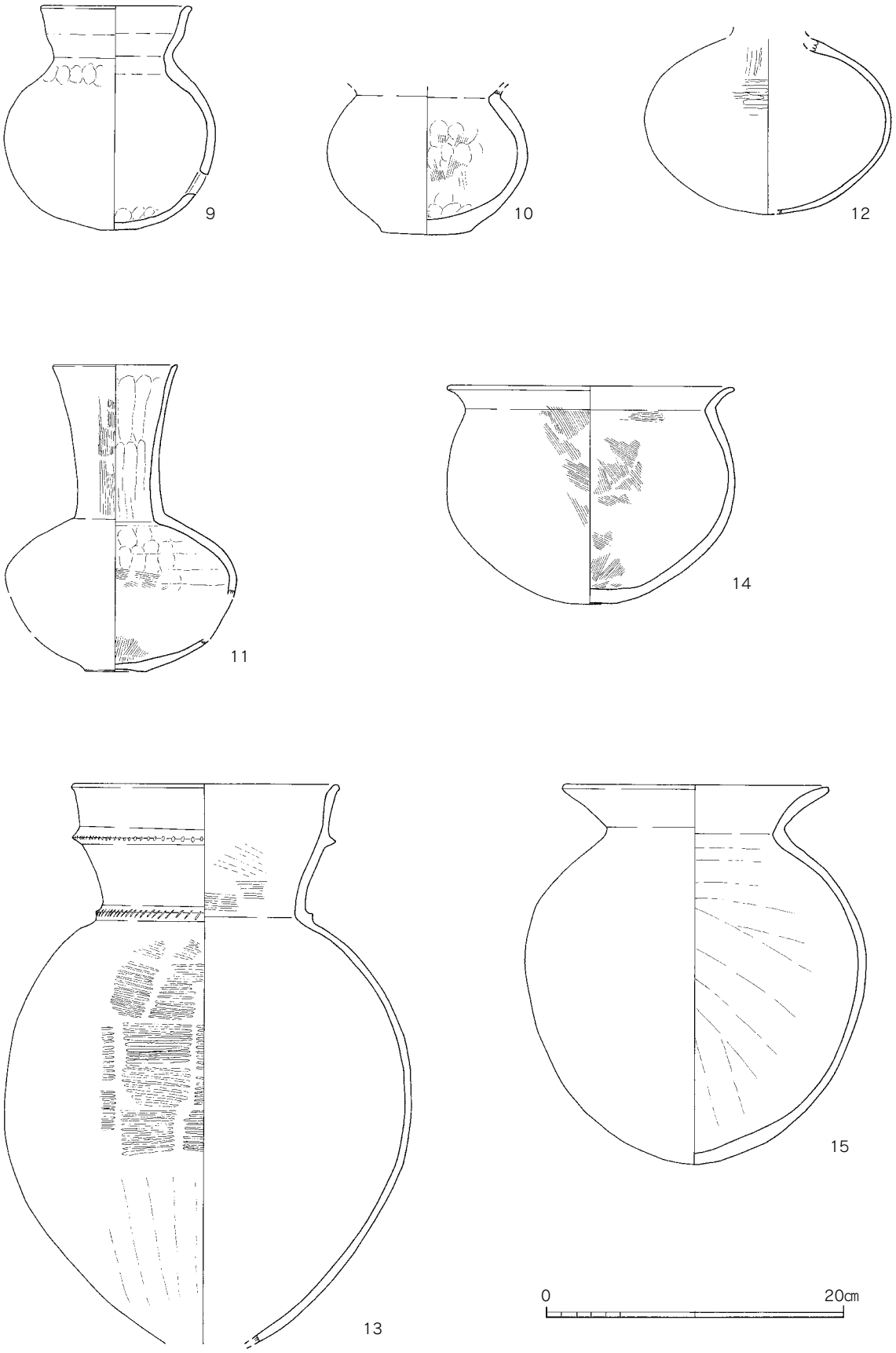


Fig. 16　34 号溝出土遺物実測図 1（1 ／ 4）

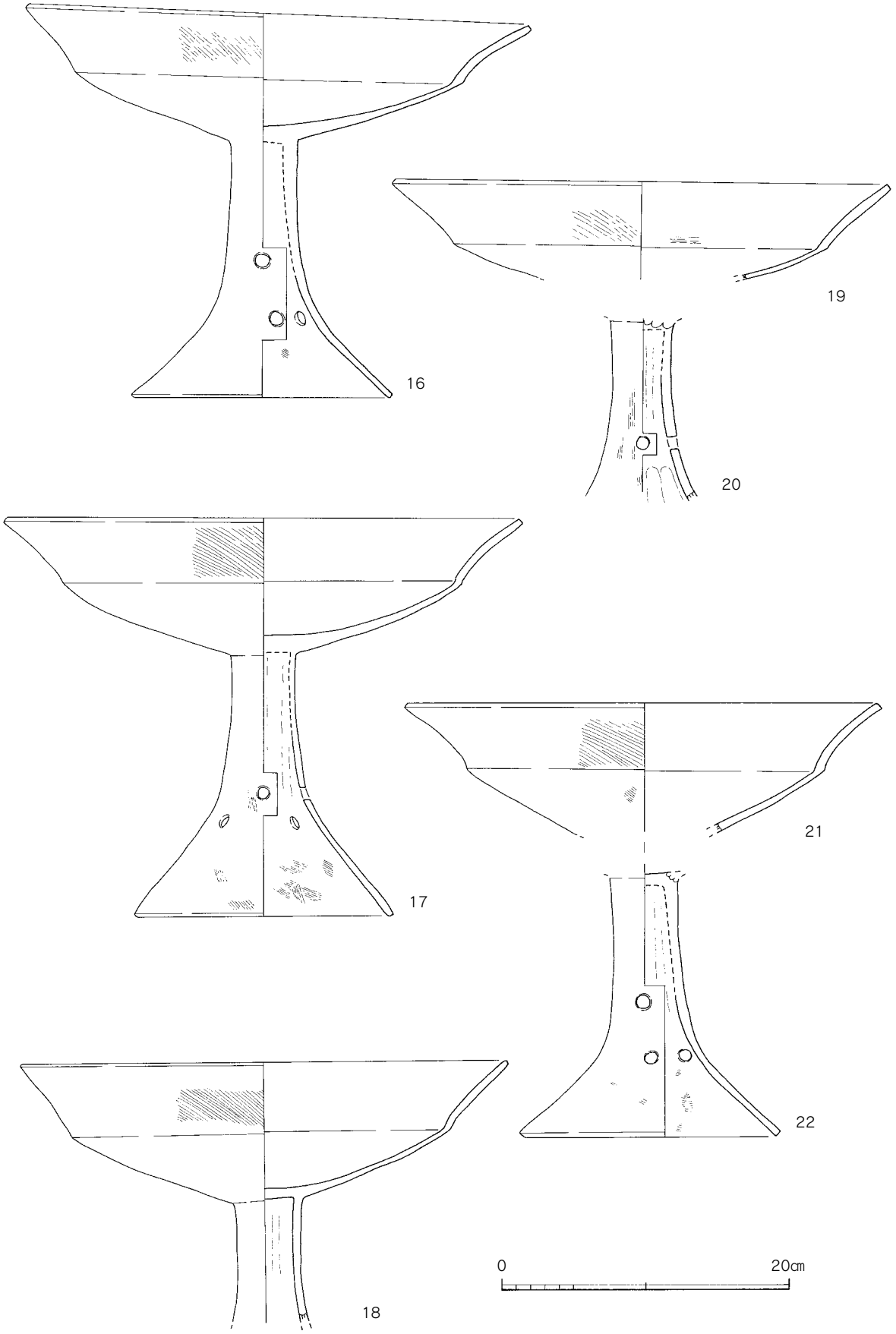


Fig. 17　34 号溝出土遺物実測図 2（1 ／ 4）

の二重口縁壷である。口縁部は、一旦緩やかに外反した後に小さく屈曲して垂直に立ち上がり、端部は短く外反する。この口縁端部は、小さく外方に摘み出し、上縁を水平に整えている。胴部は倒卵形をなし、頸部との変換点と二重口縁の屈曲面には其々1条の三角凸帯を張り巡らし、ヘラ先状工具によるナナメの線刻を施文している。調整は、口縁部がヨコナデ、胴部外面は上半が平行叩き痕、下半はヘラケズリ、内面は押圧ナデ。胎土はやや粗く、小〜中砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は淡褐色〜淡灰褐色。14は口径が19.4cm、器高が14.6cmの鉢で、直径が2.5〜3cmの小さな平底状の底部が付く。口縁部は短く「く」字状に外反し、端部は水平に摘み出している。胴部はやや肩の張った半球形で、底は肉厚になる。内外面ともに押圧ナデ後にやや粗いハケ目調整。胎土はやや粗く、細砂〜石英中砂粒のほかに雲母微細粒を含み、焼成は良好。色調は淡黄橙色。15は、口径が18cm、器高が25.5cmの土師器甕である。口縁部は大きく「く」字状に外反し、胴部はやや肩の張った卵形をなしている。調整は口縁部外面がヨコナデ、内面がナデ。胴部は外面が叩き後にナデ、内面は粗いヘラケズリ。胎土には小〜中砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は赤褐色。16〜23は、高坏である。16は、口径が34.7cm、脚径が18.1cm、器高が27.3cmである。坏部は、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は屈曲して緩やかな稜を作って大きく外反する。ラッパ状の脚部は長くのびやかに外反し、中位には上に2孔一対、下に3孔一対の円孔を対称位に穿っている。調整は、

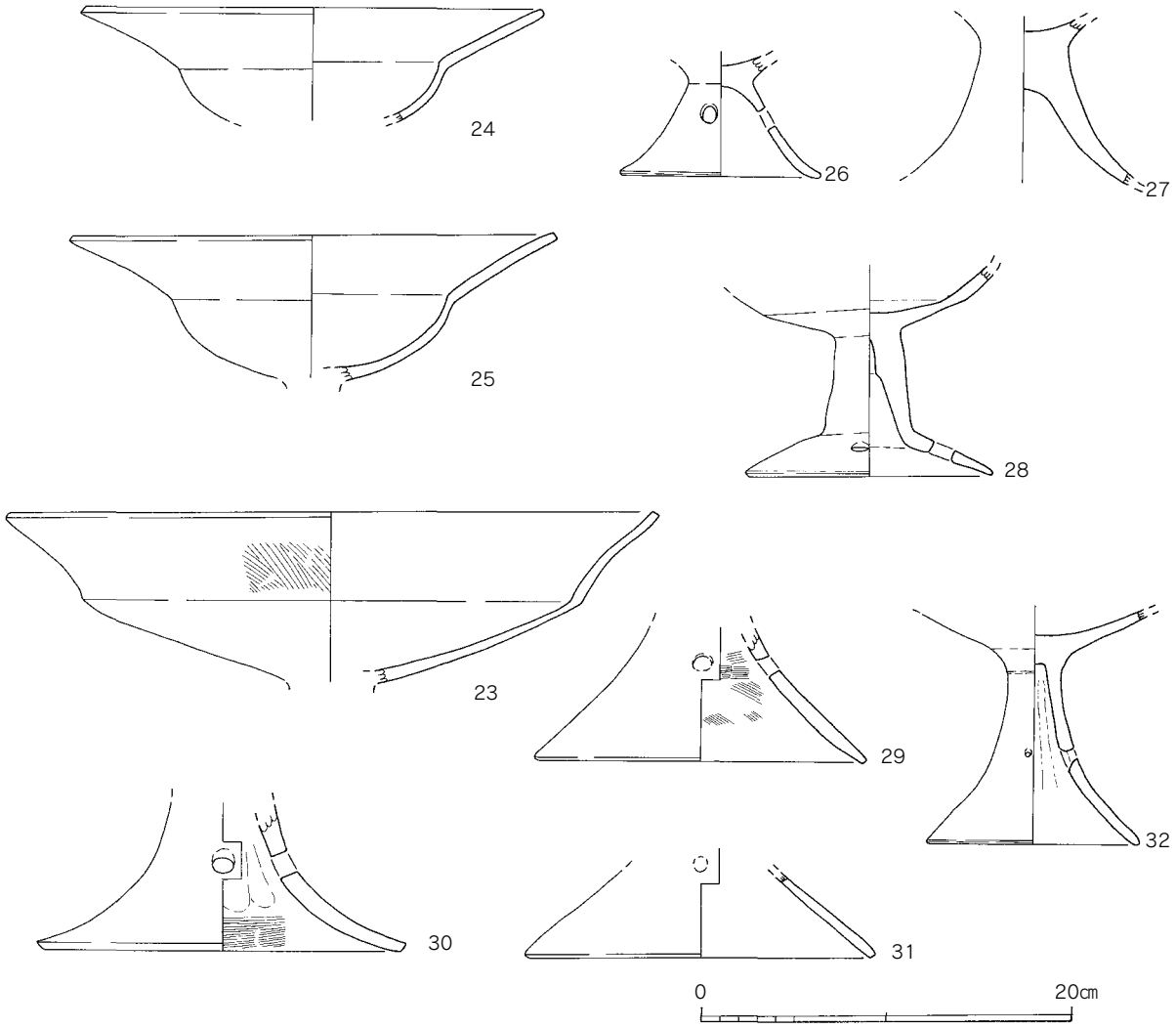


Fig. 18　34号溝出土遺物実測図3（1／4）

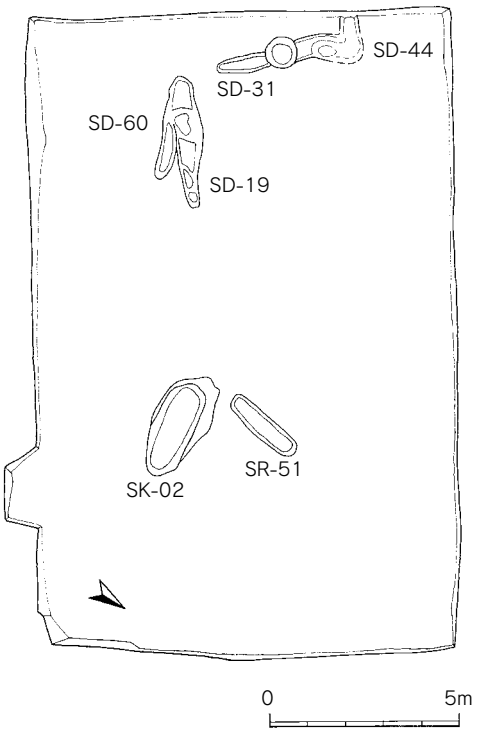


Fig. 19　古墳時代の遺構配置図
（1 ／ 200）

坏部ナデ～ヨコナデ、口縁部が左上方～右下方へのハケ目。脚部内面は絞り～ハケ目。胎土は良質で、小砂粒～中砂粒を含み、焼成は良好。色調は明褐色。17 は、口径が 36cm、脚径が 18cm、器高が 27.8cm である。坏部は、体部が内湾気味に立ち上がった後に一旦小さく直口して緩やかな段を形成し、口縁部は大きく外反する。脚部はラッパ状に大きく外反するが、脚裾は緩やかに屈曲して短く直線的に内傾する。脚部の中位には、上に２孔一対、下に３孔一対の円孔を対称位に配している。全体に摩滅が著しいが、坏部の口縁下には左上～右下にむかって粗いハケ目、脚部は内面上部が絞り、脚裾ない外面にはやや細かいハケ目調整。胎土は良質で、石英小砂粒と長石粒を含み、焼成は良好。色調は明褐色。18 は、口径が 33.9cm。坏部は、体部が丸く膨らみ、口縁部は緩やかに屈曲して小さな稜を作り、やや直線的に外反して立ち上がり、端部は丸く収めている。脚部は裾部を欠くが、のびやかに外反するラッパ状の脚部になろう。器面の摩滅が著しいが、坏部の口縁下には左上～右下へのハケ目調整で、脚部内面には絞り痕がある。胎土は良質であるが、細砂粒～粗砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は淡明褐色。19 は、口径が 34.6cm の坏部である。口縁部は内湾気味に立ち上がる体部が一旦屈曲して緩やかな稜を作って大きく外反する。口縁部にはハケ目調整痕が残る。20 はラッパ状に開く脚部で、２孔一対の円孔を穿っている。いずれも胎土には小砂粒～粗砂粒を多く含み、明褐色で 19 と同一固体をなそうか。21 は、口径が 33.2cm の坏部で、内湾する体部はやや深い。体部からのびる口縁部は、屈曲して緩やかな稜を作って小さく直口して大きく外反する。調整は外面にやや粗いハケ目痕が残る。22 は、脚径が 18cm の脚で大きくラッパ状に外反する裾部は小さく内湾気味に立ち上がる。脚中位には上に２孔一対､下に３孔一対の円孔を対称位に穿っている。円孔上の内面には絞り痕、下～脚裾はハケ目後にナデ調整。いずれも胎土は良質で、小砂粒～粗砂粒を多く含み、色調は淡明褐色を呈す。21 と 22 は同一のものであろう。23 は、口径が 35.2cm の坏部である。内湾気味に膨らむ体部はやや深く、口縁部は小さく屈曲して大きく外反する。口縁部外面はやや粗いハケ目調整。胎土は良質で、小砂粒～中砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は淡明褐色。24・25 は、坏体部が玉葱状の扁平な半球形を呈する高坏の坏部で、ラッパ状にのびる脚部が付こう。口縁部は体部が強く屈曲して内面に稜を作り、その屈曲点から大きく外反する。24 は、口径が 25cm、現高が 6.1cm である。胎土は精良で小砂粒をわずかに含み、焼成は良好。色調は明赤褐色。25 は、口径が 26.4cm、現高は 8.2cm で外底面には脚部の剥落痕が残っている。胎土は精良で小砂粒をわずかに含み、焼成は良好。色調は明赤褐色。いずれも器面の摩滅が著しく、調整は明らかでない。26 ～ 31 は、小型高坏の脚部である。26 は、脚径が 10.8cm、現高が 6.5cm で、脚部は短くラッパ状に外反する。脚部上位には対称位に三つの円孔を配している。調整は、脚部内面は指頭押圧後にナデ、坏部内面～脚外面はナデで、裾部には赤色顔料痕がある。胎土は良質で、微細砂粒～石英小砂粒を多く含むほかに赤褐色粒と雲母粒を含み、焼成は良好。淡赤褐色。27 は、脚部は朝顔状に大きく外反し、坏部

との接合面は肉厚である。胎土は良質で、微細砂粒と雲母微細を多く含むほかに少量の小砂粒と赤褐色粒を含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色。28は、脚径が13.4cm、脚高が7.4～7.8cm。脚から緩やかにのびた坏部は、小さく屈曲して口縁部へと続く。脚部は細く筒状にのび、強く屈曲して内湾気味に大きく外反する。屈曲点下には2個の円孔があり、本来は4孔で一対をなしていたものと考えられる。全体的に摩滅が著しいが、内面は押圧ナデ、脚内面は絞り後にケズリ。胎土は良質で、微細砂粒～石英小砂粒を多く含む。色調は淡明赤橙色。29は、脚径が18cm。脚部は朝顔状に伸びやかに外反し、脚中位には円孔が穿たれている。調整は裾部がヨコナデのほかはタテ～ヨコ方向のハケ目。胎土は良質で、小砂粒をわずかに含み、焼成は良好。色調は淡明褐色。30は、脚径が20cm、現高は8.1cm。脚部は朝顔状に大きく外反し、中位に3孔一対の円孔を対称位に配している。調整は外面がナデ、内面は裾部がヨコハケ目、上半は指頭押圧ナデ。胎土はやや粗く1～2mmの砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は淡赤橙色。31は、脚径が19.4cm。朝顔状の脚部は内湾気味に外反し、中位には円孔が穿たれている。胎土には小～粗砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は明淡褐色。32は、脚径が11.6cm、現存高が12.8cm。坏部は伸びやかに外反し、脚部はラッパ状をなしている。脚基部には小さな段が付き、中位には2孔一対に小さな円孔を焼成後に穿っている。脚部内面には絞り痕がある。胎土には微細砂粒～小砂粒のほかに赤褐色粒をわずかに含む。内面は淡黄白色、外面は淡明橙色。33は長さ8㎜、直径3㎜、孔径1.5㎜の碧玉製管玉である。色調は灰褐色。34は長さ10.7㎝、最大幅3.5㎝、厚さ1.2㎝の鉄族である。基部付近が錆ぶくれしているが、残りは比較的よい。35は現存長12.5㎝、幅5.3㎝。厚さ0.4㎝の石剣未製品である。石材は頁岩で、表面は剥離している。

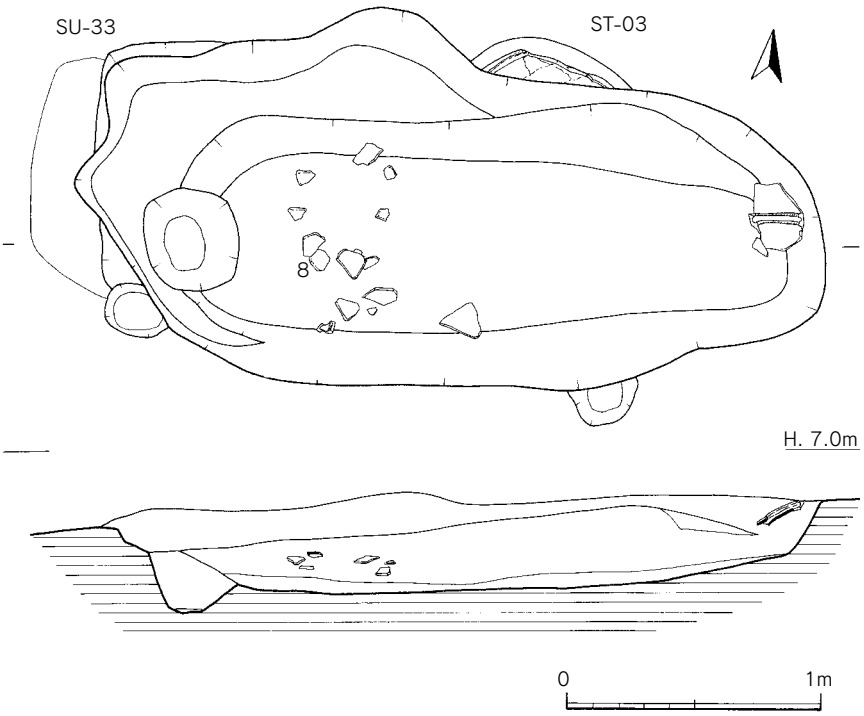


Fig. 20　2号土壙実測図（1／30）

４．古墳時代の調査

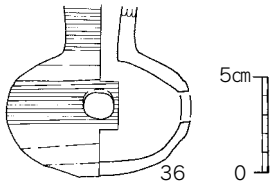


Fig. 21　２号土壙出土遺物実測図（1 ／ 4）

古墳時代の主な遺構としては、総柱の掘立柱建物跡２棟と３本柱の柵列、土壙２基のほかに多くの柱穴を検出した。これらの遺構は、外観的には調査区全体に拡がっているが、面的な狭小さを勘案すると主な遺構は柵列を中心にして東側に拡がる傾向がある。検出した主な遺構のうち、掘立柱建物跡と柵列は、第８次と第７２次調査で確認された柵列や総柱建物跡と比べて構造的、規模的にきわめて似た在り方を示しており、その有機的な相関性が窺える。一方、土壙は調査区の西半域に偏して分布する傾向が窺えるが、これが分布のすべてを具現しているとは考えがたく、その全容は即断しがたいものがある。また、柱穴の中には直径が 10 ～ 20cm の明瞭な柱痕跡を残すものも多々あるが、１棟の建物跡としてひとつにまとめ得るものは確認できなかった。

１）土　壙（SK）

２号土壙　SK － ０ ２　（Fig. 20・21　PL.4）

２号土壙は、調査区の東端にある大型の土壙で、３号甕棺墓や 33 号貯蔵穴と重複しているが、その中で最も新しい。平面形は、概形として長軸が 298cm、132 ～ 150cm の不整な長方形プランを呈するが、その南側壁と東小口壁に沿って長軸が 258cm、短軸が 105cm の土壙を掘りこんだ２段掘りの構造をしている。深さが 35 ～ 40cm の壁面は緩やかに立ち上がる。壙底は、浅い凹レンズ状をなし、断面形は U 字状をなす。覆土は、茶褐色土の単一層で須恵器甕や坏、ハソウが出土した。

36 は口縁部がラッパ状に外反する須恵器ハソウで、胴部径は 9.7cm。胴部中位に孔径が 1.7cm の円孔を成形時に斜め上方から穿っている。ラッパ状の頸部下位と胴部中位はカキ目調整で、肩部には櫛歯文を描く。胎土は良質であるが小砂粒～粗砂粒をやや多く含み、焼成は堅緻。色調は暗青灰色。

２）土壙墓（SR）

５１号土壙墓　SR － ５ １（Fig. 22　PL.5）

５１号土壙墓は、調査区の北東部に位置する土壙墓で、北小口壁に接して 50 号貯蔵穴がある。土壙墓は、長軸が 210cm、短軸が 48 ～ 54cm の隅丸長方形プランを呈し、N － 9°－ E に主軸方位をとる。壁面は北小口壁が緩やかな外は急峻に立ち上がり、壁高は 23cm。壙底は中央部が浅く凹レンズ状に窪んだ舟底状の断面形をなしている。覆土は、濃い茶褐色土の単一層で、壙底からは土師器甕片や須恵器甕片に混じって楽浪系の陶質土器甕片が出土した。

３）溝遺構（SD）

１９号溝遺構　SD － 19　（Fig. 23　PL.6）

１９号溝は、調査区の南西隅にある短い溝で、西端は 60 号溝を切っている。溝幅は、60 ～ 78cm、全長が 50cm で、東端が先細りになっている。最深部までの深さが 35cm の溝底は、両端部際にピット状の窪みがある２段掘り状の断面形をなしている。覆土中からは弥生壷片や土師器片、須恵器甕片、ハソウ片の外に黒曜石片が出土した。

37 は口径が 16.8cm の土師器甕である。口縁部は緩やかに外反し、胴部は張りの弱い倒卵形とな

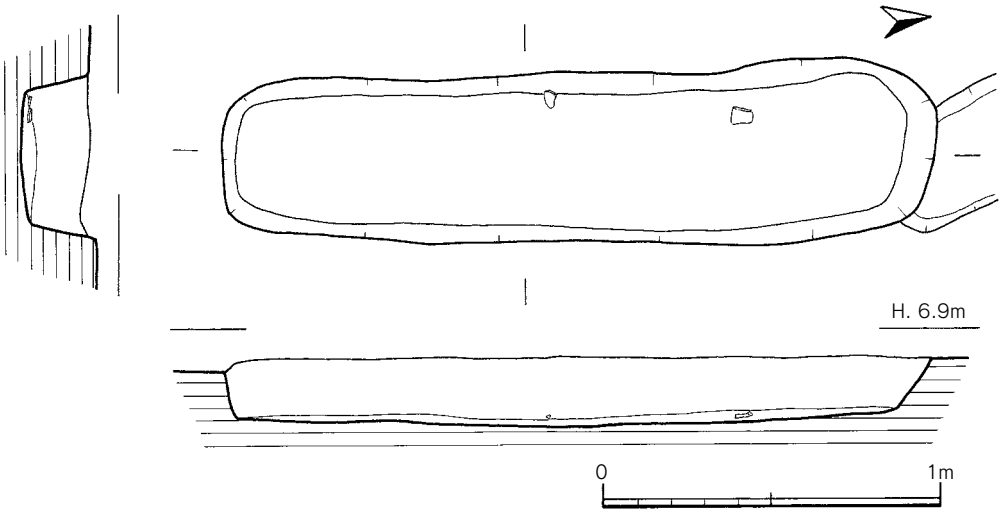


Fig. 22　51 号土壙墓実測図（1 ／ 20）

ろう。調整は、口縁部がヨコナデ、胴部は内面が粗いヘラケズリ、外面はハケ目後にナデ。胎土は良質で小砂粒をわずかに含み、焼成は良好。色調は赤褐色。

３１号溝遺構　SD － 31　（Fig. 23　PL.6）

３１号溝は、調査区の西端にある南北方向の溝で、北端は撹乱壙で消失しているが、状況的には矩形に西へ折れて 44 号溝に繋がるものと考えられる。溝幅は 45~65cm、深さは 20cm。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い U 字状をなしている。覆土中からは弥生の丹塗り壷片や土師器甕片がわずかに出土した。

４４号溝遺構　SD － 44　（Fig. 23　PL.6）

４４号溝は、調査区の西端にある東西方向の溝で、撹乱壙下で南へ矩形に屈曲して 31 号溝に繋がるものと考えられる。溝幅は 42cm、深さは 12cm で壁面は緩やかに立ち上がる。断面形は浅い U 字形をなす。

６０号溝遺構　SD － 60　（Fig. 23　PL.6）

６０号溝は、調査区の南西隅にある短い溝で、西端は 19 号溝、東端は 34 号溝に切られた不整形な土壙状の遺構上にあるが、覆土的に端部を確認できなかった。溝幅は約 45cm、深さは 15cm で、断面形は浅い U 字状をなしている。遺物は須恵器甕片や玄武岩片が出土した。

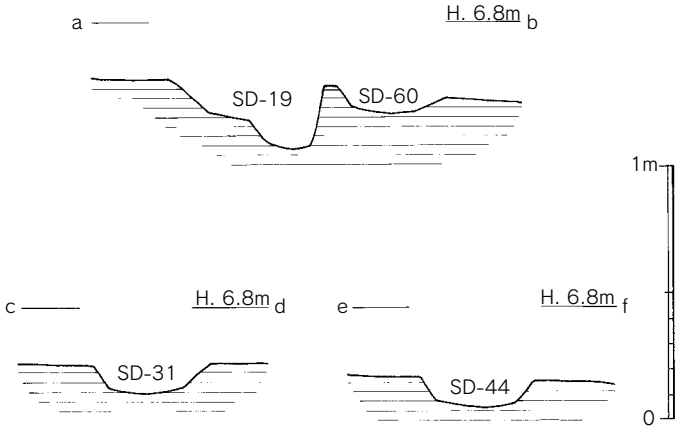


Fig. 23　19・31・44・60 号溝断面図（1 ／ 30）

Ⅲ. おわりに

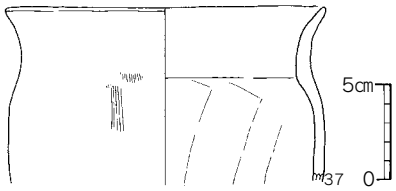


Fig. 24　19号溝出土遺物実測図（1／4）

比恵遺跡群は、那珂川と御笠川に挟まれた比恵丘陵と通称される中位段丘上にあり、この丘陵は幾筋にも開析された浅い谷が湾入して複雑な地形を呈している。第120次調査区は、この比恵丘陵の丘陵尾根の南西部に占地しており、標高は約7mであるが、昭和初期の区画整理事業によって大きく開削されており、旧状を留めていない。第120次調査では、弥生時代と古墳時代中期の遺構を検出した。これらの遺構群は、比恵から那珂へと続く丘陵上で通有に見られる遺構の拡がりを示している。時期的には、古墳時代の遺構は稀薄で、弥生時代の遺構がやや濃密に分布していると云えるが、きわめて狭小な調査区内での成果ではその傾向がそのまま比恵丘陵南西域の在り様を示しているとは云い難く、周辺の調査事例と併せて検討することが不可欠である。ここでは本調査区の成果について簡単に整理して今後の参考としたい。

本調査区での最大の成果は、貯蔵穴6基を検出したことであろう。これらの貯蔵穴は、現状では調査区北東部の8m四方のきわめて狭い範囲に1m～2mの間隔で密集しているが、調査区の東方や北方にも拡がっている可能性も十分に考えられ、その周辺域には貯蔵穴を開削し、活用した集落域が展開している可能性も想起される。本調査区の貯蔵穴群は、平面形的には半円形～長方形プランを示している。断面的には入り口側の壁面が垂直に掘り込み、そこから左右に壁面を拡げた後に対面に向かって半円形あるいは長方形に床面を拡げている。その後、この対面の壁面は一旦外側にむかって掘り拡げた後に緩やかにドーム状に掘り拡げて天井部を造りだしている。しかしながら、この天井部は低く、人が活動するには屈んだ姿勢を余儀なくされる高さしかなく、多量の資材の保管には供しがたい規模である。本調査区の貯蔵穴は、入り口部が一方の壁面に付く構造で、断面形は靴下状をなしている。このような構造は、比恵遺跡群内の数箇所の調査区で見られるが、入り口部が中央にありフラスコ状の断面形をした貯蔵穴群も混在している。このことからすれば断面形が靴下状をなすものとフラスコ状をなすものが開削した集団間の相違によるものかは住居域と貯蔵穴域あるいは墳墓群と関わりを十分に加味した上で、比恵遺跡群全域を俯瞰して検討する必要がある。

また、調査区の南縁で検出した溝状遺構（SD－34）は遺構には終末～古墳時代初めの高坏や壷などが大量に投棄されており、きわめて特徴的な遺構である。しかしながら南上縁が未検出のためにその構造や性格は明らかでないが、南方の第36次調査区との間に幾ばくかの空間域があり、南へ折れて矩形の周溝状をなす可能性も否定できず、この空間域の調査が望まれる。いずれにしても本調査区のように狭小な調査域で検出した遺構をもってすべてを論じることはできず、今後は各期の集落域とその集落域に付帯する貯蔵域や墳墓域を総合的に再検討して論じる必要がある。

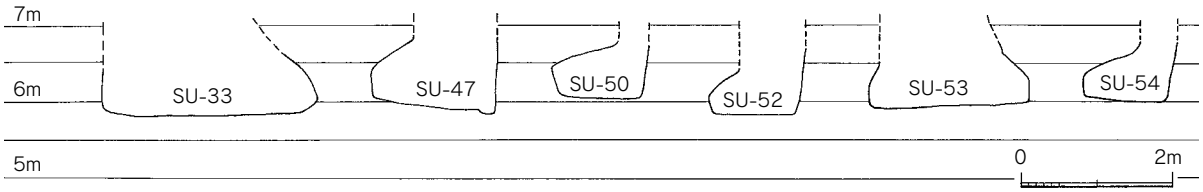


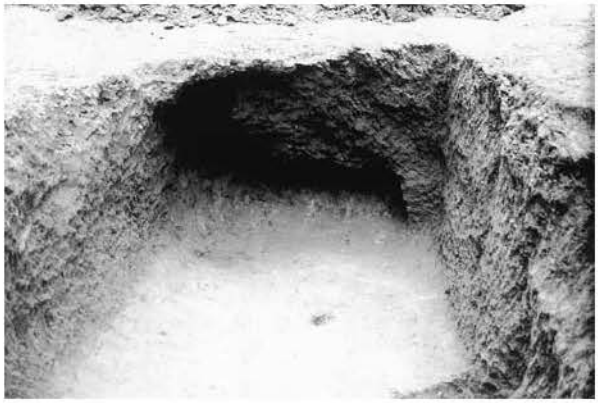
Fig. 25　貯蔵穴断面模式図（1／100）

1）調査区全景（南から）

2）調査区東側貯蔵穴群（南から）

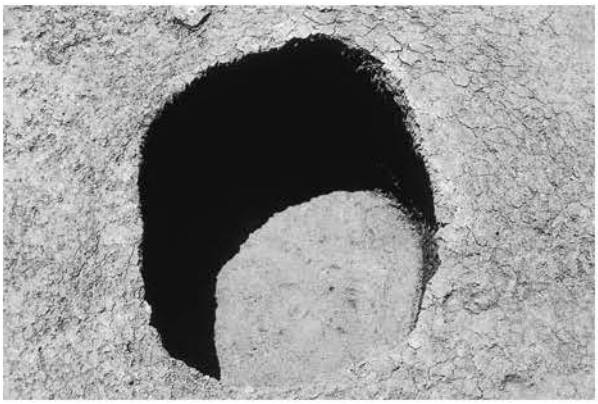
1）33 号貯蔵穴（南から）

2）33 号貯蔵穴（東から）

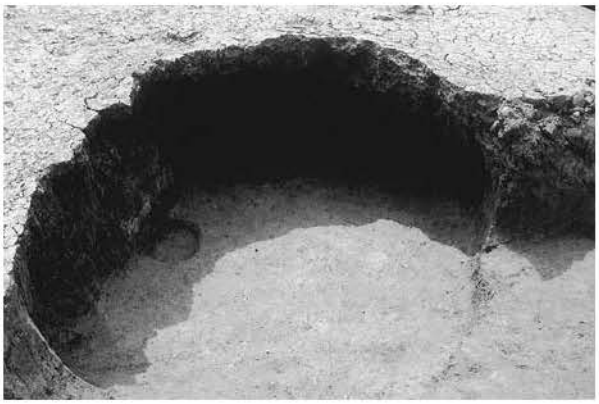


3）33 号貯蔵穴断面（東から）

4）47 号貯蔵穴（北から）



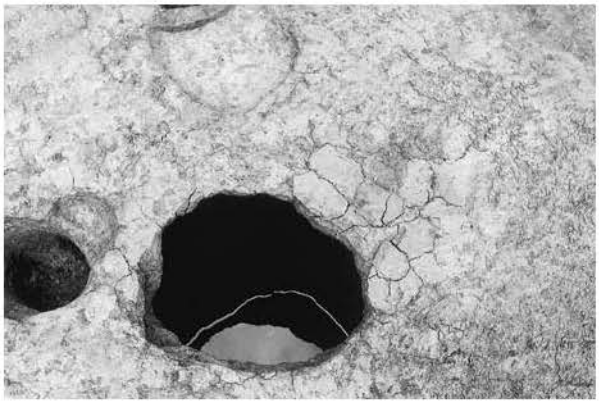
5）47 号貯蔵穴（東から）



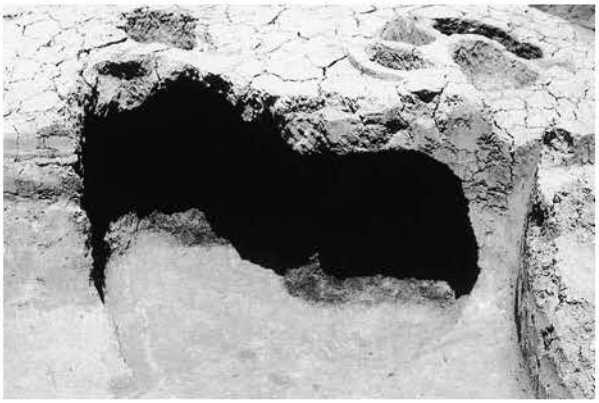
6）47 号貯蔵穴断面（北から）

7）47 号貯蔵穴（北から）

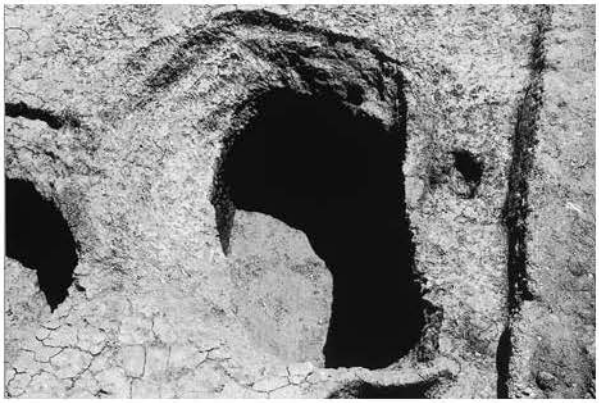
8）47 号貯蔵穴遺物出土状況（西から）



1）50 号貯蔵穴（西から）



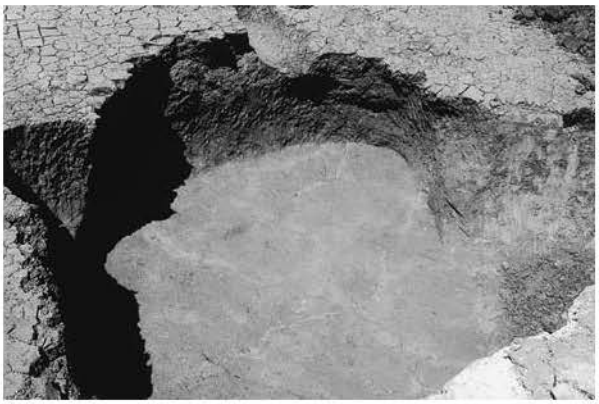
2）50 号貯蔵穴断面（南から）



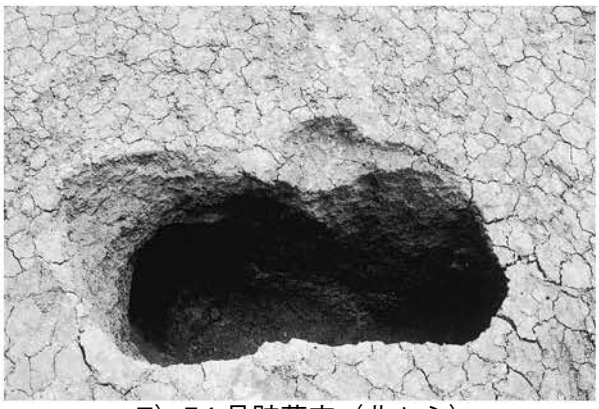
3）52 号貯蔵穴（東から）

4）52 号貯蔵穴断面（東から）

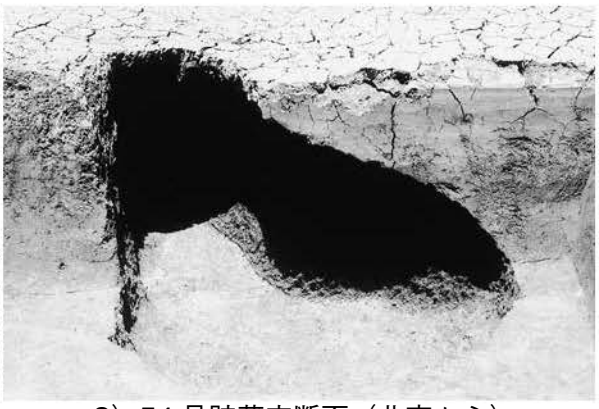
5）53 号貯蔵穴（東から）



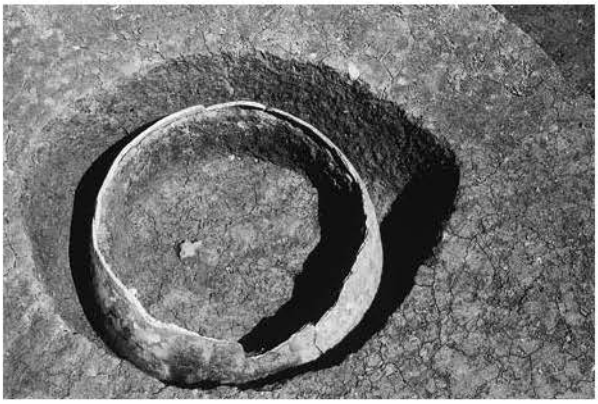
6）53 号貯蔵穴断面（東から）



7）54 号貯蔵穴（北から）



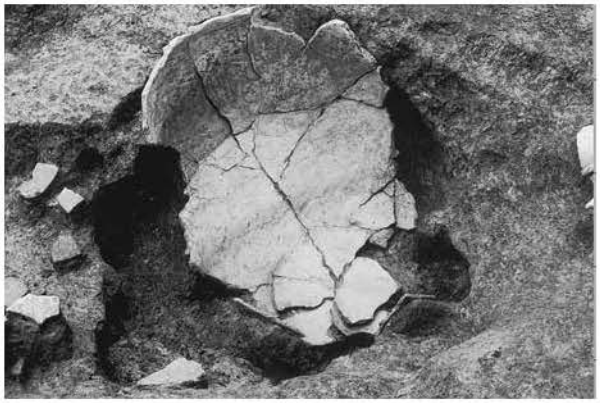
8）54 号貯蔵穴断面（北東から）



1）１号甕棺墓（西から）

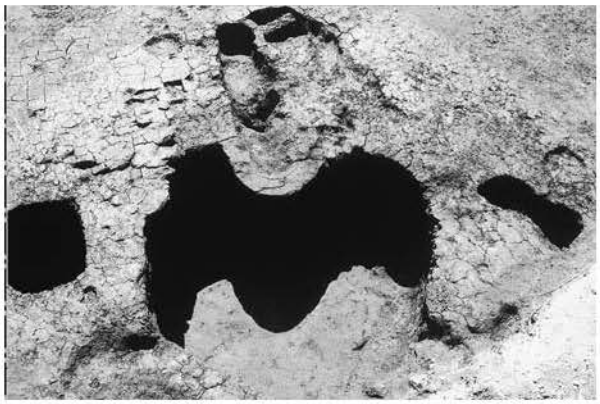
2）１号甕棺墓断面（東から）

3）３号甕棺墓・２号土壙（南から）



4）３号甕棺墓（南から）

5）３号甕棺墓（西から）

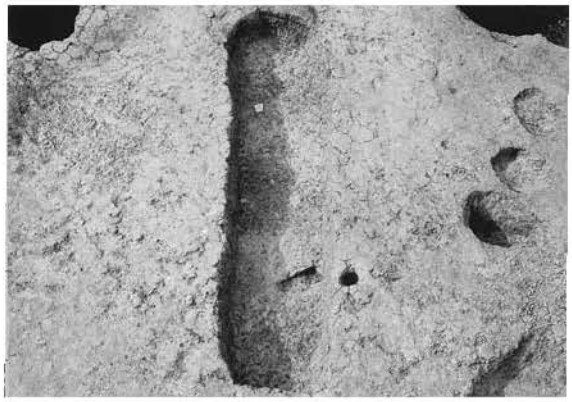


6）49 号石棺墓・53 号貯蔵穴（東から）

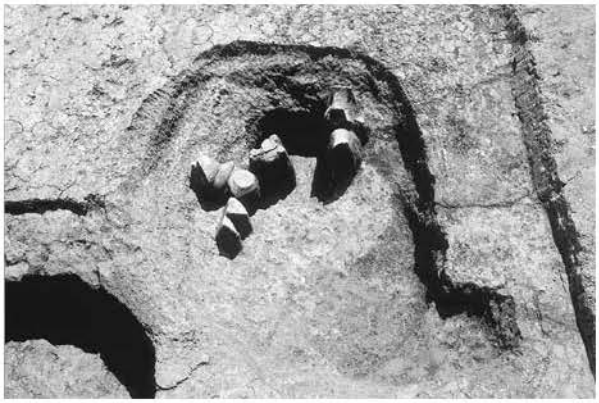
7）49 号石棺墓（東から）

8）49 号石棺墓（南から）

1）51 号土壙墓（東から）



2）51 号土壙墓（南から）



3）48 号土壙（東から）

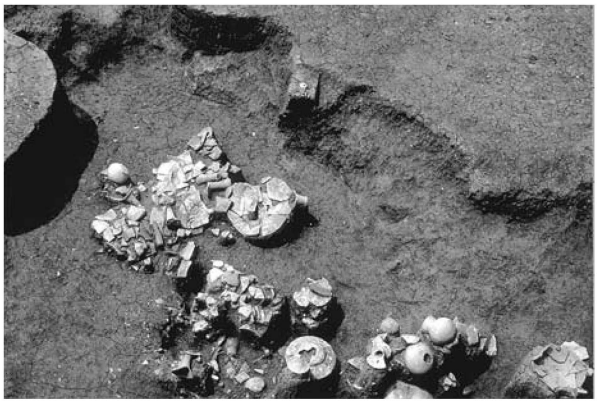
4）48 号土壙（南から）

5）48 号土壙遺物出土状況（東から）

6）34 号溝（東から）

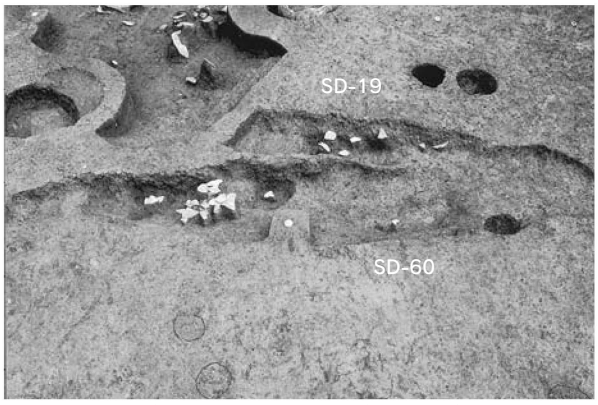
7）34 号溝西端部（西から）

8）34 号溝西端部（南から）

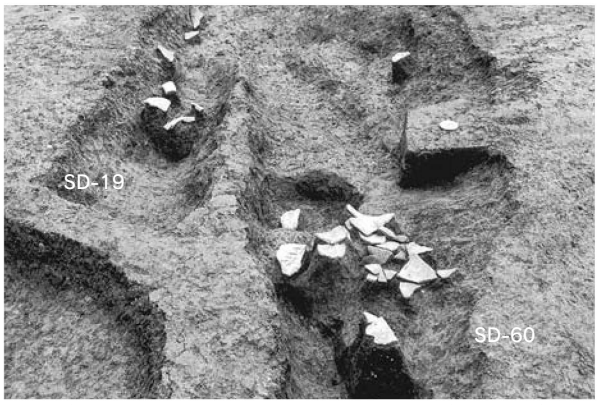


1）34 号溝西端部遺物出土状況（南から）

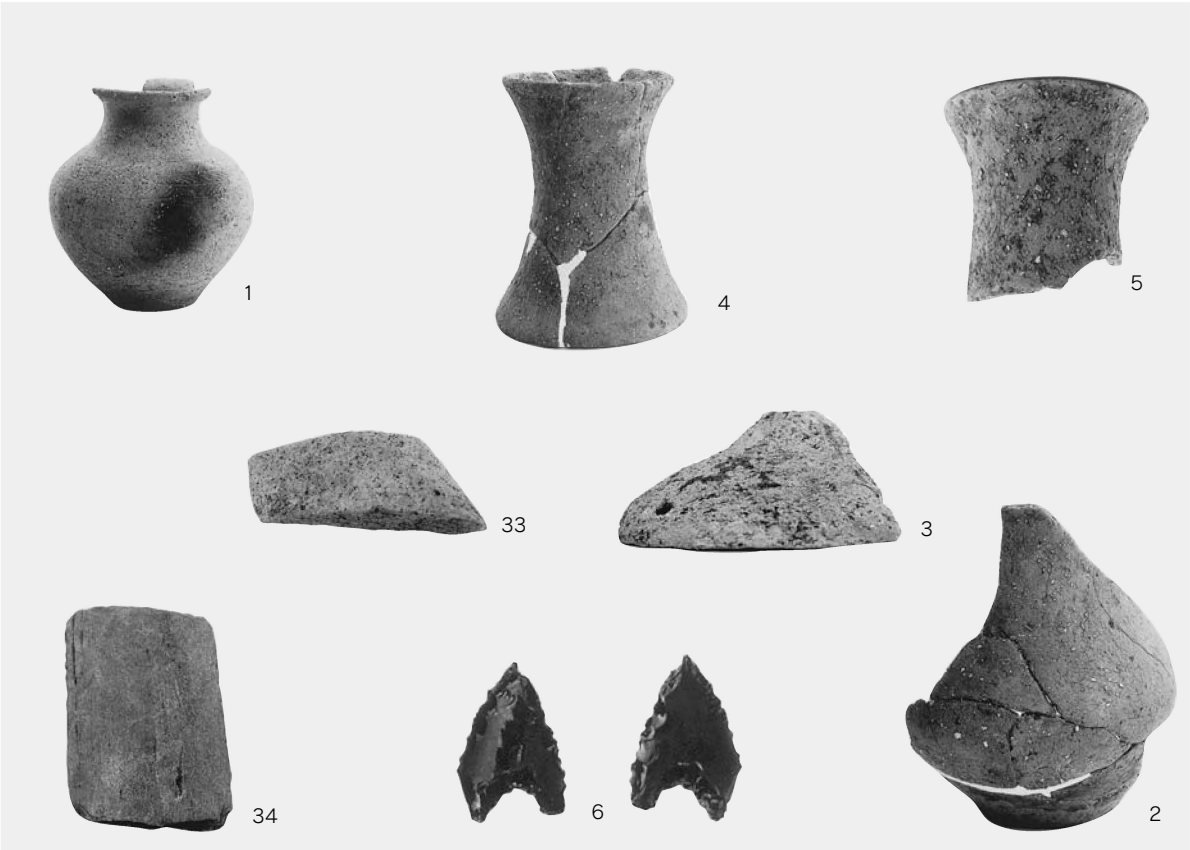
2）34 号溝東端部遺物出土状況（南から）



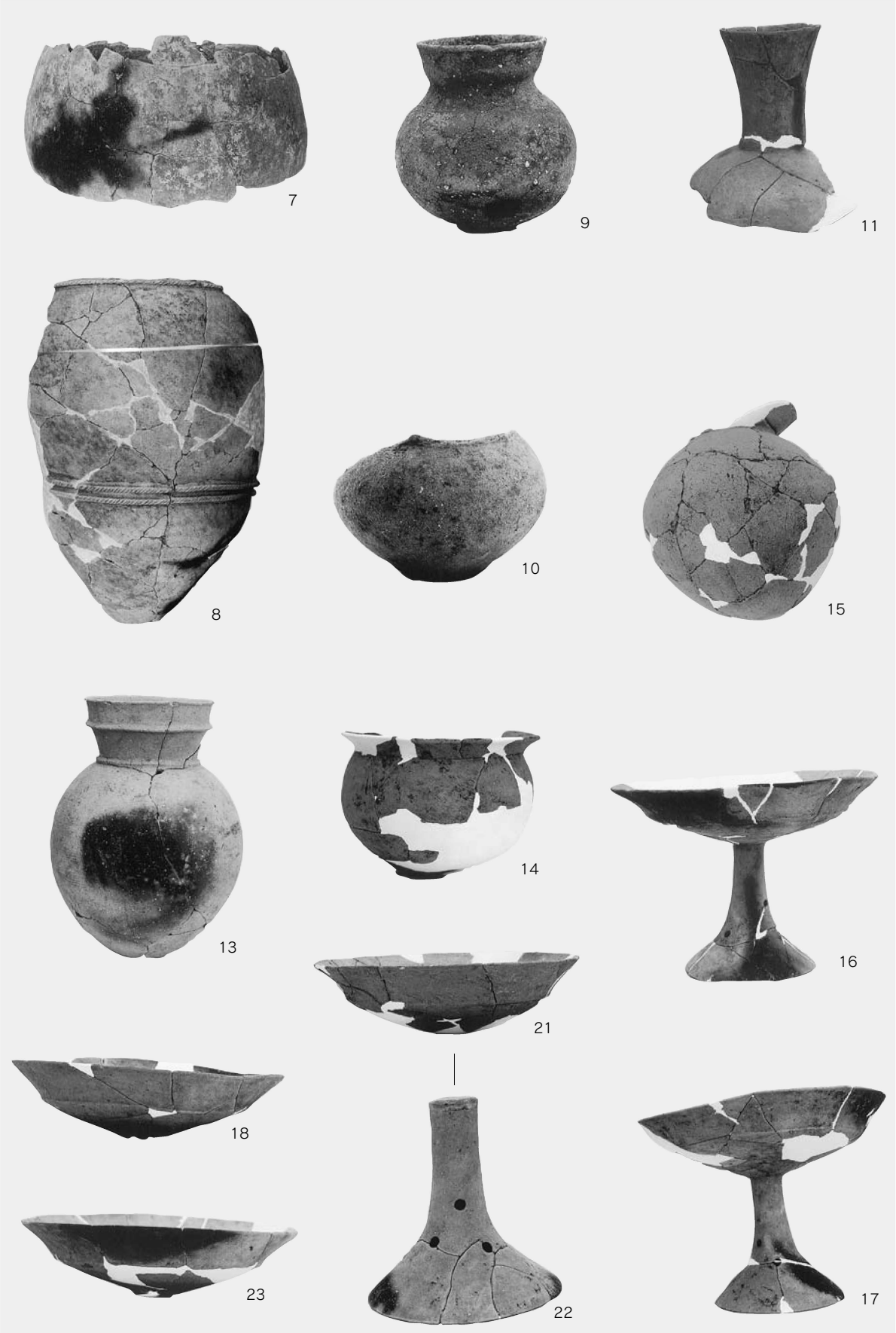
3）19・60 号溝（北から）



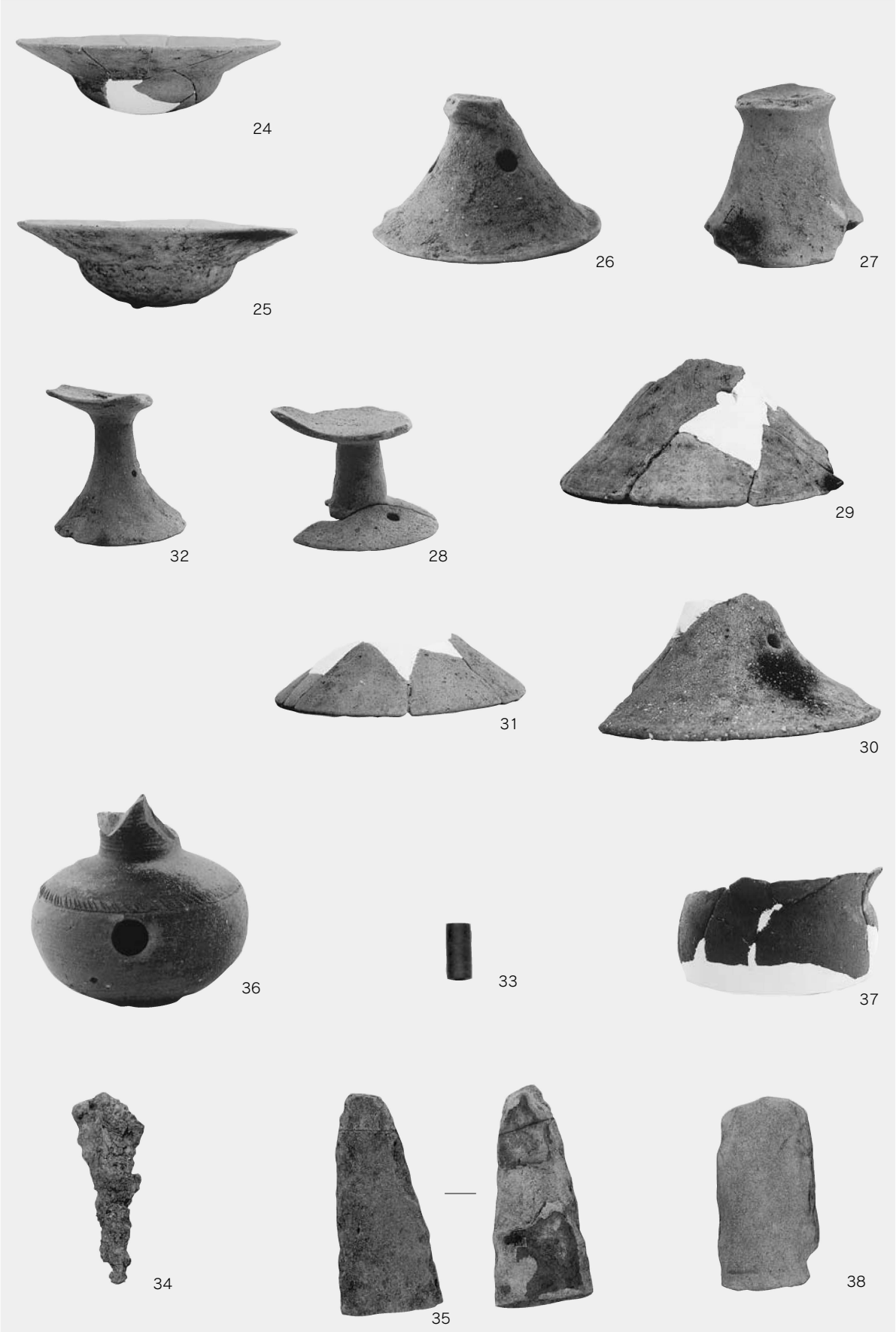
4）19・60 号溝遺物出土状況（東から）



5）出土遺物１（縮尺不同）



出土遺物２（縮尺不同）



出土遺物３（縮尺不同）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひえ
書名	比恵 62
副書名	－比恵遺跡群第１２０次調査報告－
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 1132 集
編著者名	小林義彦
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒 810-8621　福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2011 年３月 18 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
比恵遺跡群（ひえいせきぐん）	福岡市博多区（ふくおかしはかたく） 博多駅南６丁目（はかたえきみなみ） ３１－５	40130	0127	33° 34′ 36″	130° 25′ 49″	20100413 ～ 20100520	166	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
比恵遺跡群 第１２０次	集落・墓地	弥生～古墳時代 初頭	貯蔵穴　甕棺墓 土壙墓　土壙　溝	弥生土器、土師器、 石製品、鉄器、玉	

比　恵　62

―比恵遺跡群第120次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1132集

2011年（平成23年）3月18日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　株式会社　エージェント
福岡市中央区高砂1丁目20番2号